

ひょうご現代詩集2018

今年、「ひょうご」現代詩集2018」が刊行されました。これは二年に一度、兵庫県現代詩協会の会員が足並みをそろえるアンソロジーで、こうして手にとってみるといつも感無量の感慨をおぼえます。前にも書きましたが、兵庫県現代詩協会は阪神・淡路大震災の翌年、一九九六年十一月に創立しましたが、地震の中で、あるいは地震の体験を軸に、広く県全体に詩を書く人たち、もしくは詩を愛好する人たちに呼びかけて、つまりそこに共同の意志をもって生まれたと言っても過言ではありません。そういう意味では震災後二十三年を生きた証言的要素が今年のこのアンソロジーにはあります。

それにしても、昨年から今年にかけて、地震のみならず、大型台風が日本列島を直撃し、今まで体験したこともない集中豪雨、河川の氾濫、土石流が町々を呑み込んで、ライフラインが寸断され、被災者の方々のなかには今も避難生活を余儀なくされている方も多数おられます。またことしの夏はこちらも今まで体験したこともない酷暑で熱中症の危機にさらされ、命を落とされた方もおられます。自然災害による被害が国内といわず世界的にもあふれ、中世期のような法外な世来たるとして絶望にさいなまれたことでしょう。そして自然災害だけではありません。近年の世界情勢もたいへん厳しいなかにあつて、私たちはそんな時代に立ち合っていることを思うにつけても、私たちは時代を選ぶことができないのだから、この時代にしっかりと向きあつて、批評眼を養って、しっかりとした眼差しをもって生きていかなければならないと自問自答する日々です。それにしても私たち究極自然を支配することができないとしたら、自然に寄り添うしかありません。私たち人間も自然、だとしたら自然と共生する事が大事です。人類は謙虚になりなさいということでしょうか。そんなことを思うにつけても地震、津波、放射能など私たちは今す

べてについて反省する時代にかけているのではと思います。そしてこういった危機意識を根底に持つてこういうことを考えている個を作りあげていくことがとても大切ではないかと、私は詩の書き手のひとりとして最近とくに思います。

阪神・淡路大震災から二十三年、と思うにつけても、神戸はまた神戸大空襲でも大きな被害を受けました。大震災は高度成長の末期ではありましたが、それでも日本の経済は戦後に較べて比較にならない豊かさのなかにありましたから、当時の人びとはもつときびしい困難を生き抜いたと振り返る必要があります。

ともあれ、世界は不条理に満ち満ちていると思うにつけても、その不条理を引き受けていく。詩の書き手としてはその不条理をコア（＝核）として書いていくことが必要ではないかと思えます。私たちは過去をバネにして未来を見つめるための想像力を養っていかなければなりません。バラ色の未来だけでなく、負の未来も見つめて警告を発することができ存在でなくてはならないと思えます。たとえばバルザックやゾラの小説のなかに当時の時代や人間の生きざまが生き生きと描かれていて私たちの前に立ち上がってくるように。

それにしても私たちは互いがひとりひとりであることによって私たちです。百人いれば百人の、千人いれば千人の客観的外部にたいする見方があります。兵庫県でいえば地震と言っても、姫路、明石、神戸、とそれぞれ地域によっても違いがあるし、神戸市内でも旧市と新市でも違うし、住まいが活断層の上にあったのとなかったのでも違います。そして地震に限ったことではありません。だからこそ個が大事です。なによりも個の自立、個を作りあげることが大事だと私は思います。

繰り返しですが、自然災害も盛んだし、世界情勢も厳しいというなかにあつて、詩を書く私たちは筒いっばいの生活を守りながら言語表現をつづけてきて、ここに今年もアンソロジー「ひょうご現代詩集2018」に結実することができました。このことを自覚しながら、さらに明日（＝未来）にむけて、また新しい一步を踏み出したいものです。

目次

詩を書くひとりとして最近思うこと	二	夢の森／風でありたい	植村 孝	三六
——震災と文学雑感	二	ぐるぐる	内田 正美	三八
瞳孔の奥の	八	最後の詩、あるいは死体	梅村 光明	四〇
義父の始末	一〇	うすい臉の下に	江口 節	四二
善き日	一二	「ふわあーっとした何か」	大石 玉子	四四
過去	一四	風の軌跡	大西 隆志	四六
あだちかつとし	一四	しとやか	大橋愛由等	四八
ガルニエ宮	一六	読点の打ち方	尾崎 美紀	五〇
いつくしみ深き	一八	巡る思い	和比 古	五二
四万十川	二〇	生きる	かただときこ	五四
こな雪（パウダースノー）	二二	巨人の星たち	神尾 和寿	五六
あざり貝	二二	埧塙	亀井真知子	五八
雨の一日	二四	無限表情―宿痾を超える瞬時の光に―	香山 雅代	六〇
願いごと	二六	毒きのこ殺人事件（今昔物語巻二十八より）	彼末れい子	六二
おじビルと春	二八	美術館にて	神田 さよ	六四
役割／ひと時の	三〇	コスモス	北岡 武司	六六
ちから詰まる日	三二			
	三四			

雨後	北川 清仁	六八	シグナル	関 はるみ	一〇二
時間	北野 和博	七〇	おおるり	高木 敏克	一〇四
若い頃／電車に乗って	北山 幸子	七二	すいくちつつみ	高谷 和幸	一〇六
福音	季村 敏夫	七四	沼から沼	たかとう匡子	一〇八
細い路地の角に	工藤恵美子	七六	川の音	高橋 夏男	一一〇
みんな五月の光のせい／六月	黒住 考子	七八	夢の底で／ゆうまづめ	高橋富美子	一一二
太る	黒田 ナオ	八〇	ぼくが子供だった頃	たかはらおさむ	一一四
過疎の町でも夢はある	小杉 ヨウ	八二	朝の音楽とは／枯葉をはりつけると	田中 信爾	一一六
年の初めに	小西 誠	八四	妻に就て／ぎっこんばったん	田中 莊介	一一八
手紙／手帖／旅立ち	佐伯 圭子	八六	舌	武内健二郎	一二〇
ふるさとの声／庭先の道／机上の落書	佐藤 勝太	八八	SUMAHO	玉井 洋子	一二二
桜守	坂本 久刀	九〇	パパを待っています	玉川 侑香	一二四
オムニバス	佐野 博美	九二	人は誰でも	田村 周平	一二六
さくらちゃん	在間 洋子	九四	へそで茶を沸かす／おにいちゃんに	まけないよ	
階	紫野 京子	九六	藤色／そのところから	張 華	一二八
ゴルフセンター	柴田 実	九八	落下と飛行	月村 香	一三〇
「蜘蛛の糸」再考	鈴木 豊子	一〇〇		寺田 操	一三二

ちいさいひと	時里 二郎 一三四	留守	野田かおり 一六四
観察眼	内藤富美代 一三六	白衣の人	信定 和美 一六六
さくら むる	中堂けいこ 一三八	朝／夜のロータリー	橋本 千秋 一六八
おのれ生え	永井ますみ 一四〇	癌よ	八田 光代 一七〇
断捨離	長岡 瑛美 一四二	初釜	浜田多代子 一七二
ドライブ——二時間で行ける所へ	中川 道子 一四四	生きるとは	春名 純子 一七四
介護する人／先生にお願い／大きなあたたかい手	中島 友子 一四六	花譜	平岡けいこ 一七六
／同朋	中島 瑞穂 一四八	ちいさいおうち	坂東 里美 一七八
犬の形	中嶋 康雄 一五〇	妖精ナンパ術	福田 知子 一八〇
バツタのような人間	なす・こういち 一五二	無の始まりから永遠へ	福田さとる 一八二
自分の中の階段を	西海ゆう子 一五四	宙に翔ぶ	福永 祥子 一八四
尹東柱の母	西川 保市 一五六	蕩児達の時代	藤井 清 一八六
一日一枚のはがき	西村 好子 一五八	キグルミ怪獣の最期	藤本 紘士 一八八
世界を分節化する幼児		翼なき天使	法橋 太郎 一九〇
石段を降りる／不在であること		揚羽蝶	牧田 榮子 一九二
		朝靄を	増田まさみ 一九四
		私的風景	松下 玲子 一九六
あんさん	にしもとめぐみ 一六〇	夜毎の散策	丸田 礼子 一九八
	野口 幸雄 一六二		

探す	水こし町子 二〇〇	お盆の帰省バス	凜 清太 二二二
ジャコメッテイの「歩く男」に遇った	宮浦 久子 二〇二	時の花／摩耶	渡辺 信雄 二三四
彼女が払うんだらうな	三宅 武 二〇四	会員の発行物（詩集、詩画集、詩誌ほか）	二二六
森のある村の鬼の太鼓	室井 正彰 二〇六	編集メモ	二四四
三国海岸へ遥かな記憶	望月 逸子 二〇八		
暮色の旅へ	森田美千代 二一〇		
地名抄 三篇	安水 稔和 二一二		
わたしのほけつと	山口 洋子 二一四		
葉ずれとクラッパ	山下 輝代 二一六		
ポン・ヌフ	山下 晴久 二一八		
五W-H（いつ どこで 誰が 何を なぜ どのようにに）	山崎 啓治 二二〇		
君に	山中ゆきよし 二二二		
季節の裂け目	山本 眞弓 二二四		
嘘つき	山本 彰子 二二六		
生き仕舞い	由良佐知子 二二八		
砂の色	横山美代子 二三〇		

瞳孔ひとみの奥の

青木 左知子

瞳孔ひろげて
星ひとつ
見つけた
空の砂漠の
こちら 黒い裏側
うなだれて過ぎる
生き物のむくろ
一列
二度ともどらぬ種の
血の湿り残る
土
重く沈めて
歴史ながれに果て
あるや

なしや
ヒトもまた
ヒトもまた
やがて

焼きたいほどの寂寥が
わたしの星を異常燃焼させる
横たえたからだを炎が這い
振りくる砂塵のごときなものか
ふりしきり降りしきり
衣擦れる青墨いろの気配あわあわ
いく重にも幾重にも

義父の始末

朝倉 裕子

死んだら献体しようと思う
九十歳を前にして義父ちちが言った
驚おどいて義母ははに聞くと
死んだら本人には分からないわよ
と義父のいないところで事もなげに言う

数年後に義父が亡くなった時
義母が書類を出してきた
夫婦が互いに承諾して
献体登録をしてあった
夫や兄妹は誰も何も言わなかった
遺言になるメモには
葬式は不要のこと
挨拶状の文面
そして
二十軒程の送り先が記してあった

三年間のシベリア抑留
舞鶴港に降り立った日
四十歳の誕生日を迎えたという義父は
借家住まいのまま
墓も持とうとしなかった
翌日やって来た医大の職員は
遺骨引取の希望を尋ねた
義母が断ると
更に
遺髪はと念を押す
義母は少し躊躇ったあと
小さな声ではっきりと
いいと答えた
棺は五月の光の中へ
ゆっくりと出ていった

善き日

芦田 はるみ

* 生まれた

電話は短く切れた

空は青

真っ青な空に

真っ直ぐに伸びている電線がくつきり

あの

青の上にも

青が重なっていて

その上にもまた

いくつもの

青を

くぐり抜け

照る方へと

くぐもっていた母の声を
想像していた父の顔を
うすめをあげて
確かめているだろう

* 抱く

丸いお尻

じつとりとした匂い

微笑みかけると

君はつれなく目を閉じてあくびした

小さな掌の中に

握りしめている

青を

ほどけかけた細い指の間からのぞく

過去

あだち かつとし

誕生

昭和十七年七月
ぼくは誕生した
暑い真昼であった
その時 母は四十
高齢出産であった
死を覚悟していた

入学式

入学式の日
さくらが咲いていた
ほかのことは覚えていない
校舎は二階建ての木造
百二十四名が入学した
みんな粗末な服装だった

式から帰ると川の堤防で写真を撮った
ぼくは不安そうな顔をしている
入学の喜びのない顔
ランドセルを背負っている
ぼくは引っ込み思案の子だった
十までしか数えられなかった

五月雨

五月雨が降っていた
父も母もいなかった
ぼくは漠然と死について考えていた
この世に居なくなることだと思った

夏休み

毎日水遊び
ある日深みでおぼれた
苦しかった
一瞬死ぬと思った
手をばたばたさせていると
なんとか浅い所へ行けた

一人旅

小学校を卒業して
一人旅に出た
山陰線の京都市
白衣の傷痍軍人が乗り込み
悲しげな曲を奏でた

西大谷御廟 清水寺 平安神宮
博物館 映画館にも行った
大人になったような気がした

自立の一步だったのか

祈る
母に癌が見つかった
一月の雪の降っている日
母は手術室に入って行った
ぼくは天地に向かって祈った
祈ることしか出来なかった

八か月生きて

母は死んだ
百日紅が真っ赤に咲いている道を
葬儀の列が進んだ
それから父も死に
ぼくは一人になった

ガルニエ宮

阿部 由子

大海原に現れるシャガール
美の女神たちが矜持するロビーには
世界中から贈られた花束が揺れている

二千余りの席に囲まれて
円錐状の空洞の底にかすかに浮かぶステージ
非常灯の白い明かりを受けて
中空に漂う幻視のニンフたち

市民の熱狂が街を炎に包んでから四年
新たな共和制が誕生したその年
怪人の棲み家が静かに威容を現した

それからさらに長い歳月が経ち
数多くのエトワールが歓喜のカーテンコールに

身を震わせ暗転して舞台を去った

今すべての扉、窓が閉められ
スポットライトが点けられる時を待っている

四六億年の喝采と哀しみのおいを
しなやかな肢体で形象する
この空洞がやがて蘇る
開幕は 秋

いつくしみ深き

安西 佐有理

オー、友よ オー、YES
すみずみまですくわれる
物質ふみわかるあしもと掬い
午睡にそよぐ絨毛からエーテル体までに巣く
先読み万全なまがいの不幸をよるこぶあなたの
意識を救う

ああ偉大なわたしたち

(特異に得意げなわたしたち)

むなしく黒ずんだ飛行機雲のかけに咳きこみながら
山をきりくずしたハイウェイを西へ西へ

夕暮れの気配に

(懐かしさ)

としてうえつけられたモードをたよらない確信で
むすびつけて
じつに平和なわたしたちは

鹿のたましいであったテールランプを追いかける
ハロー、ハロー

あらゆる母語をすくいたまえ

はらいたまいきよめたまえ

あまねく歴史を

したしげに異界の川のながれを漂ってゆく

絶滅にはまだ猶予あるイシガメさんよ

ちよいと泊まっておいきなさい、ヨイヨイ

わたしたち自身への隷属の輪を燃やし跳びこえ

みてみぬふりのアクロバティックなしあわせを

どうぞどうぞ

消費期限ぎれですからさしあげましょう

四万十川

以倉 紘平

駅を見て佇んでいる男が私のところに住んでいる
いつも駅前の雑踏から少し離れて立っている
先日は四国の高知駅で
足摺岬や四万十川方面に行く列車の時刻表を
眺めているその男の背を見かけた

昭和二十年九月半ば

敗戦直後の近鉄南大阪線阿倍野駅

熊本で除隊になって大きな荷物を背負った私の兄は
それから小一時間ほど先にある金剛葛城二上連山の見える喜志駅から
歩いて一里ほどの古里の家に帰り着こうとしていた
兵隊さん 兵隊さん ぼくを一緒に連れて行ってくれませんか
ごった返す阿倍野駅構内
小学校低学年らしい少年にそう声をかけられたというのである
駅のある大阪天王寺一帯は 見事なほどの一面の焼け野原だった

浮浪児という言葉を目にした動乱の時代であった
連れて帰ったら良かったのかなあ
父母や弟妹のいる田舎の家の食糧事情を考えてか断ってしまったと。
電話口で初めて聞いた七十有余年前の兄の話
その子供がその後どのように生きたのかいろいろに想像するけれども
こころはなかなかに鎮まらない
兄の記憶は長い時を経て何ゆえ蘇ったのだろうか
突如 川の水面に銀鱗を光らせて消えて行った魚
遙かな駅の記憶は兄にとつての特別な一日だったのだろうか
日本中のどんな駅にも
時の川底ふかく そんな形にならぬ物語が
隠れ潜んでいるに違いない
駅前の雑踏から少し離れてたっている男
はるか遠くに小さく光る銀鱗

こな雪（パウダースノー）

井上 修子

こな雪 やつとふりました
まっけた子どもは ねています

こな雪 じっと みています
白い魔法に魅せられて……

こな雪 そっと ふりました
桃色八重の さざんかに……

こな雪 もっと ふりました
道にも 屋根にも ふりました

こな雪 ずっと ふりました
あとからあとから ふりました

とおいあの日の 傷あとを
繕いつづけた 絹の糸
優しく かくしていくように
こな雪 ずっと ふりました
静かに 静かに ふりました

夜ふけ ほのかな雪明かり
胸の奥にも 小さな灯
明日へ そっと あたためる

こな雪 こな雪 音もなく
こな雪 こな雪 ふりつもる

あさり貝

井之上 幸代

明日の朝までの命と知らず
似せ物の塩水の中で
ゆらゆらと触覚のように
あんぐりと管を伸ばして
ぶつぶつと何やら呟いている
大海原の砂の中より
すくい上げられた不運を
今さら悔いても仕方あるまい
まるまると太った裸身を晒け出して
最後の一夜をゆったりと過ごすがいい
天寿を全うしきれなかった無念さを
存分に吐露するがいい
此の世に生まれて
僅かの生きてきた過去が
幸せだったのか

耳を傾けて聞いて上げよう

雨の一日

猪谷 美知子

窓の外は雨雨雨心の中はどんより
キーボードは暇をもてあまし無駄話を始める
私と話はしたくないと右肩上げて
隣のアルファベットと最近の世間事情を
パソコンの持ち主を差し置いて小賢しいこと
ふむふむと
耳を傾ける
聞くだけって
気楽だね
どんよりのまま時間は過ぎ雨は降り続き
そのうちにキーボードLはOを誘い
OはVに声をかけVはEを引っ張り込み
前列にしっかり整列
今日一日の成果を持ち主に報告に来た
私はどうすれば良いのだろうか

威厳を持って叱り付ければ氾濫は必須
そもそも耳を傾けたときから主導権は相手に
それにしても単細胞な四文字が並んだことよ
この程度のうすい話に耳を傾けるだけで良いなら
楽なこと
でも彼らは整列に努力した私は何に努力した
雨が振り続けている

願うこと

今村 欣史

ピーポーピーポーの音はこれまで他人事だった
待ち構えていた救命スタッフの
いち にっ さんっ の声
身ぐるみ剥がされ 固定され 気づけば まるで処刑台だ
剃毛 尿管挿入 点滴 心電図器装着など されるがまま

集中治療室を経ての四人部屋

午前二時のこと

向かいのベッドに若い看護師がやってきた
カーテンの向こうから
細い声が洩れてくる

オシッコを出してほしいんですよ

わたしの父は昭和36年6月に死んだ。48歳だった。片方の腎臓を摘出する手

術を受け、もう一方の腎臓で生きながらえるはずだった。ところが術後、オシッコが出なくなり尿毒症で間もなく死んだ。わたしは17歳だった。

看護師の自らの願う事のような声が
もう一度

オシッコが出てほしいんですよ

明くる朝

導尿バッグを点検する看護師の声

オシッコ メッチャ出ましたねえ 良かったあ。

おじビルと春

入江田 吉仁

おじビルを 春に訪ねる
ビルの敷地は バスの駐車場をしており
地面が 砂利のけばだつ粗いコンクリートでおおわれている
そこから ぬくい空気が上がってくる
ここまで 建物に挟まれて日陰の通路をたどってきた私に
初めてのようぬくもりがあり
熱が地面から放射しているのかもしれない
私からだはそれに近いほうの半身でそれを感じる
その一角に2階建てのビルが
少し仕事を控えながら しかし 現役で 立っている
バスの事務所をしている
おじのからだは地面で
ビルがおじの顔だ
おじ といっても私にはだいたいの想像がつく
おじは ビルの年齢では4、50歳のはずだ

私のほうが年上なのである
おじたち、ビル、は 人間よりも倍の速さで老いていく ちょうど
犬が10倍の速さと言われるように
そういうことがあるのだ
そこで私は ビルがおじであると 得心することができ
人間年齢で もう80を越したおじは
私の人間の父と兄弟にあたる年齢になる これは おじだ
バスが出払った昼
おじはぬくぬくしているから ひまのようにしているから
私はなつかしくて 帰省したときのように話しかける
前に、人間には戦争と戦後があった
父の世代のことだ
おじには というと
おじビルの地べたの下をさぐるなら
おじのからだをさぐるなら ということだが
おじにも空襲という戦争と痕跡があった と
言えるかもしれない
コンクリートはごわごわで ぬくい

役割

岩井 八重美

蜘蛛が獲物に
糸を巻きつけている
見とれていると
糸巻きから出た獲物の足が
ふいに動いて
思わず

巣をはたき落としていた
逃げ去った蜘蛛
獲物はどこかに落ち
残されたのは
千切れた巣と
火照った体と
凍えた指先

心を持ってあます時

蜘蛛と獲物と私の
ささやかな
ないに等しい
この世の役割を
手練り寄せたりする

ひと時の

雨の中
赤信号で車を止める
前に止まる車のナンバーを
ワイパーの動きに併せて
頭の中でくり返していると
ふいに
別の組み合わせが浮かぶ

新たな四桁は
できたてだが
懐かしく
意味を持つ
ようなのに
ひと時見つめ
また見失うしかない

ちから詰まる日

岩崎 風子

積乱雲が首をかたむけている
さつき 川で掬って飲んだ水は
すっかり汗になってしまった
ようやく辿りついた頂上で
天と

わたしとの近さを感じている
その近さが
なぜだか とても懐かしい恩寵に支えられていると思う
それからふっと
——昔読んだ〈かなしみよ こんにちは〉とか
たった一語に収まる世界はないものか
だなんてことが浮かんでは消える

そうやってずっと膝をかかえていたら
ほんの一瞬強い風が頬をはしる
すると歩いてきたずっと下の方で若草の群れが

獣の背のように靡きうねっていた

わたしの懐の奥ふかくに
たちまち青あおと茂る夏草のうねり
大地は徐々に浮きあがり
わたしの白いシャツは風をはらみ旗めく

その額に 注がれる
ちから詰まる気魄よ
ことばを打つ雨の日々
かなしみの燃え殻になって声を失くした日々
夏草に迷いこんだ一頭の獣よ

ちから詰まる日
姿の見えぬ百鬼にむかって
尻尾しっぽの尖を立てて何か 吠えていた
遠い天に
覆いつくす天に

夢の森

植村 孝

驚かないでくれないか

ぼくの森には小鳥もいないし

カラスもいない

リスや狐もいない

ただの大きな木がうつそうと繁っている

日も差し込まないし

地肌はじめじめして

緑色の苔だけが岩肌にごびりついている

小動物もいない

キノコ類も生えていない

小川は流れているが

魚は棲んでいない

ここに魚が棲めるように

日本中を旅して

旅先で捕らえてきた魚たちや

ゲンゴロウそれにザリガニなどを

放流したいんだ

その上欲を言えば

小鳥たちやカラスそれにフクロウ

狐やリスの小動物を捕獲してきて

森に放つ

そして夢の森が出来る

普通の何処にでもあるただの森だけれど

風でありたい

ただ風でありたい。

窓から吹き込んでくる冷気にさらされ

引き締まった思いで風になる。

風は黄色であっても構わないし青い透明色でも良
い。

風を食べて生活したい。

風に吹かれて生活したい。

風になって生活したい。

オレンジ色のようにも成っても構わない。

風は自由だ。

ぼくも自由だ。

風だから

どこにでも飛んでいける。

風をジュースのように飲んで

あるいはカクテルのように飲んで、

風になって街角を通り抜けて

君の住む街へ……。

ぐるぐる

内田 正美

同じところを 回る
朝から夜まで 夜から朝まで
ぐるぐると
地球のことではない
地にはり付いた シミのような
その男の つまらぬ物語(はなし)
誰にも気づかれず 気にもされず
ひとまわり 次の日もまた 同じように
ネットで地球の裏の暮しを盗み見る
そしらぬ顔して 歩く
寝る 遊ぶ
同じところを
失敗もして サクセスもあり
気にもせずに
鏡も見ずに

たまには思いがけない事もあつて
道端のきれいな花に 目をうばわれて
次に見た時には 枯れていて
忘れようとして 忘れることができないこともあり
空に見たことないような雲
ぼくは ぼくを奈落の底へ突き落す
時間だって 見えるときがある
もう消えて なくなるものもある
冷たいビンの牛乳のんで
毎日

毎日

これが ぼくのやり方
現実の世界の重力に 堪えている
闇のなかでも 目を凝らせて
ぐる ぐる

最後の詩、あるいは死体

梅村 光明

*
初夏の一日レンタカーを走らせるきみに福島県双葉郡川内村への道は鳥の囁きが聞こえるほど静かだったすれ違う車もなく人にも逢わなかった行き着いて玄関の戸を開けると上がり框に書き上げられたばかりの卒塔婆が二枚見えた声を掛けたが返事はなかった長福寺では辻潤と伊藤野枝の長男山好きで女好きの知的なユーモリスト辻まことの墓を漸く探し当てペットボトルに詰められた南アルプスの水をまるで犬のおしっこのように注いだ青空には切れ切れに雲が流れ地上では厄介な放射線が身体を侵し続けるモノローグな炎昼自死を選んだまことの言葉を聞きたいと切実に思う

**

酒に酔い人を殺した手応え
が残る夢を見た誰にも相談

できずにその場所を思い出
そうと繰り返かえし酒を飲ん
だ殺人犯になった気持ち
が真つ赤な色のままコップに
溢れだし口を割らずに持っ
て行くのは砂を噛んだよう
にむずかしいので黙秘する
しかない別れの言葉をひ
とつふたつ呑みこむ畳の上
にはわたしだったアルコール
漬けにされた若々しい死
体が躰をかいている皆が楽
しそうに笑っている明日は

うすい瞼の下に

江口 節

稜線の峰をつないで送電線が延びる
街に入ると小さな丘に跳び次の山へ向かう

鳥が 夜に渡るのを知っていますか
昼間は餌をついばみ うつらうつら
タカやワシの来ない夜
ちいさな鳥やカモたちは一気に飛ぶ
目は 昼ほどは見えないけれど
地形の微かな低周波や星の位置を探り
先を行く仲間の風を追い
連なる灯りをなぞる

だが 送電線は闇に溶ける
知らず触れて
家の前に

今年はおオバト 去年はヒドリカモ
見つけるのは いつも朝
植え込みに落ちていたいつかのオシドリ
溝にコガモ メボソムシクイ——
どれも傷一つなくうすい瞼を閉じていた
遠い大陸や北の国から飛んできて
もうすぐ目的地だっただろう
見上げる真上に
六本七本 送電線がたわむ

平坦な旅路などこの世にあるはずもないが
一つの死に もう一つの死を思う
うすい瞼の下には
瞳にしまわれた風景が広がっているだろう
長い睫を閉じて
歩み来た時間を畳んだ人の
包み持った心の
やわらかさを憶えている

追記 2017年晩秋、この詩を書き終えて印刷所に
送信した日、夜遅く帰宅した門の手前に、シロハラ
が落ちていた。まだ、温かかった。

「ふわぁーっとした何か」

大石 玉子

「ふわぁーっとした何か」が
飛んで来た

「ふわぁーっとした何か」を
受け取ってみると 私の心が

「ふわぁーっとした心」になった

「ふわぁーっとした心」になると

ギザギザな物が飛んで来ても

私の心が ギザギザにならなくなった

とんがった物が飛んで来ても

ふわっふわっと 身をかわすことができた

「ふわぁーっとした何か」は

パステルカラーのようで

淡いピンク色もあるし

淡いグリーンある

淡いパープルだってあるし
淡いブルーだってある

「ふわぁーっとした何か」は

まあるくて 小さくて

シャボン玉のようです

でも こわれそうで こわれな

あまりにも軽くて あまりにもかすかで

あまりにも ふんわり

何だか 楽しい 不思議 ふんわり

ほら そこに

ふわっふわっと 飛んで来たよ

風の軌跡

大西 隆志

風がふく
街路樹の葉がうごく
すこし射してきた光とともに
いつもの朝のこうけいに
たちどまつたら
からだのなかを風がとおるすぎ
みどりの色がのこる

風がいかる
トタン板がおおきな音をたてる
とべない鳥がきえてしまう
電線がうなりをあげてきれそうだ
くらやみをしらない家族
ローソクの火にあつまってる
ひとりひとりの顔に深みがでている

風がはしる
窓ぎわからたれさがる蜘蛛のいと
すいへいに伸びていく
うっすらとガラス映った人間は
部屋から出ていったばかり
駅まで風とともにほしる
動悸が気象の変化をつけている

風がやむ
かいてんしない羽根は海と空にとけこむ
つりさげられた伝言はゆつくりと回収され
はだかのことはもういちど声となり
ゆきかう視線のさきへ
しらない土地へとむかうまえの
たっぷり時間をとった助走にはいる

風をあび
風におされ
カヌーは湾から流れていく
多島の海をぬけ
歩道をすすむほくも
油臭い廃墟のとおりをぬけでて
傷ついた魂魄を風に吹かす

しとやか

大橋 愛由等

非現実の都市に撒いた石が雲を産む

(ツリガネソウを左手に誇らしげに持った赤い三角形は、ドアノブを右手で握りしめ、萎れて笑顔が消えたひとびとの日々をいとおしく想いはじめ、戸外に出ようとしたら、道端でいきなり出会った静寂が今日の沈黙を万民に配ろうとして賦算していたので「おはよう、今朝の不条理は軽めの塩味でした」と伝えると「では今日もきちんと意味を毀してきたのですね」と応えたのに赤い三角形は少しく顔を赤らめ「乾く石は原文をもとめて旅に出ようとしているのです」「きつと東に向かうはずです。その方角には風たちが海藻を蒐めますから」「それよりもギャモンを食べに行くために都市が浮遊してしまうのですが」「山で出会うイノシシが胎内に隠匿しているのは状況なので

す」といったしとやかな語り合いを交わしていると、列柱に囲まれたパティオでずっと小休止を続けている鴉たちが「あの水路を渡れない」とのしりあっているので「堂塔に登って見渡せば懐古が微笑むはずです」と進言したのだけれど、鴉たちは、水路に沈んだモロッコ革の古装本から逃げ出している文字の群れがアポリアを投げつけてきたり、乾く石が飛ぶことを忘却させようと月をそそのかしたり、風たちが蒐めている海藻がわたしたちの黒を剥奪してしまおうとてしている……などとのべつなく喋りつづけるので今日の沈黙をほんのわずかお裾分けしているうちにその場にいらなくなり、ずっと遠方に見えている鉄錆びた小橋を渡って水路を越えていこうとしていた。急ぎ足が分からないようにしながら。

読点の打ち方

尾崎 美紀

満腹感と喪失感が同時にやってくる
午後の4時

石畳の影が心もとなく
さつき買ったばかりの雑誌が邪魔になる
詩を書いた後の慙愧を背負ったまま
暮れ方を見上げる

と、そこから時間がずれて
人々と歩調が合わなくなる
立ち止まることをせず
瞬きをしないで突き進む先に
息が切れて青白い人々の集団

と、鉢合わせると
生温い風が起こる

アスファルトのわずかな染み
汗のようで失禁のようで嘔吐のようで
それでも辛い行進は止まらない
深呼吸の方法を忘れてしまったように

と、吸い込んだ空気が
突然ばちんと音を立てて
体中の血管に文字を走らせ始めた
らせん状に繋がれ進む人たちの間で
生まれたばかりの言葉を拾い上げると
そよ風、がさわらさわらと吹き始め

と、流れの止まった水路に
散り遅れた桜の花びらが
書きかけの詩に
はらりと読点を打った
夕暮れ

巡る思い

和比古

今日と言う一日が
慌しく過ぎようとしている
ホームの列車に乗ると
そこは異次元の世界
何処に向かうのだろうか

目の前の空き地に
二本の線路が引かれ
遠くへ車輪が運んで行く
名もない駅が次々に描かれては
停まることもなく通り過ぎていく
人間たちが集まるドロドロした街から
争いのない安らぎのあるところへ
乗客たちを連れて行くのだろうか

皆疲れた顔をしている
開閉のできる窓から
不合理で閉塞した社会を斜めに見ながら
ひとり席に座っている
過ぎ去ったことを忘れようとしているのか
これからのときを自分のものとしたい

速度を下げた
もうすぐ降りる駅かも
小気味良くブレーキがかかる
よく見れば見慣れた街
家族の待つ
明かりの灯った家は
もうそこだ

生きる

かただ ときこ

大手のハウスメーカーが開発した住宅地
戦後生まれの世代が
第二次ベビーブームの子育てに
すし詰めの通勤電車で耐える意思からだ
プレハブ校舎で過ごす子どもたちの汗
スーパーもなかった時代
商店街が造られ裏通りに市場に似た店が
競う進学塾のあつい噂も
いつのまにか
じわじわ沁みる歯抜けになる
眩くシャッターの前
育てた子どもたちは翼をひろげて

住み慣れた親たちは
高齢者でも楽しめる町づくりに穴をあける
学歴 年齢おかまいなく創立三十年を迎える高齢者大学

バス停を設けるスーパー 学校 公民館の前

若者はどこに 商店街のカラオケ通り
マイクを握り生まれ変わる姿に心をあずけ
高齢者の言葉は塵と
ひとり身の寂しさが引き寄せる
男と女 出合いが明日を
昼のカラオケ喫茶で歌える幸せを知った
九十歳の男 看護病棟の妻を毎日見舞う二年半
娘 息子がもたせた桜の花びらを手に逝く
ひとり暮らしの家事をテキパキこなし
買ひ物は協同購入
葱や大根に新曲を聞かして美味しい野菜づくり
庭の畑から聞こえてくる弾む歌声
——なよりの生きがいや
背中がすこし前屈みになっても
女性に偏見をもたない男が
この国にいた

巨人の星たち

神尾 和寿

チユータがダマテンで役満を上げる
イッテツが雀卓をひっくり返す
ミツルがヘアーをリキッドする
イッテツが雀卓をひっくり返す
ヒューマはアスファルトの道の上を走っている
アキコがとても熱いお茶をお盆にのせて運んでくる
イッテツが雀卓をひっくり返す
ホーサクが故郷に住む兄弟姉妹のことを自慢する
イッテツが雀卓をひっくり返す
ヒューマは鉄の下駄を脱ぎ捨てて裸足で走っている
シンゾーが寝言を並べる
イッテツが国会議事堂をひっくり返す
シェークスピアがたったの十秒で起承を転結させる
イッテツが日生劇場をひっくり返す
ヒューマは都会の夜明けを走っている

オンナは男になる
イッテツがひっくり返そうかどうか思案しはじめる
盗んだ手紙を
返そうかどうか
ヒューマは足を止めた
星の命は一億年
長い寿命だが 限りはある

坩堝

亀井 真知子

コロナの炎で煮た坩堝の中
刻まれた時をクシャクシャと喰う おばけ時計
無邪気に笑い顎がはずれた 黄色のゴム靴
踏みもせず終った 恋の踏み絵
うぬぼれ胸の 真珠のブローチ
みんなクツクツとよく煮えている

楽しい事は 内臓を走り融けていく
悲しい事は 情緒という巣を作る
苦しい事は 香辛料
厄介なのは恨み 溶けもせず
坩堝の底に溜まり 石になる

重い夜 子鬼が嬌声をあげ
石で私を打ちつける

青い掌に石を乗せ 誰のものと問いつめ
私の愚かさを ガラスの声で笑う
何度繰り返したか こんな重い夜を・・・
ここで坩堝の底石を取り除いて
とびきり美味しいスープを
この腕によりかけて作ろう
材料は たっぷり揃っている
時間も まだたっぷりあるはずだ
書きためた私のレシピで・・・
お迎えが来たらそれをたずさえて
あの世の鬼たちに飲ませてやろう
もし まずいと言ったら
煮えたぎったスープを浴びせ
アカンベーして地獄に逃げてやる
あの世の鬼ごっこも楽しかろうと
傾きかけた光線の隅っこで
にんまりとスープを煮る

無限表情

—宿痾を超える瞬時の光に—

香山 雅代

ひとしきり
喜・怒・哀・楽の中間げんに 仮寝する
八拍子の囃子の間まに 身を 委ね
仕手しての居ますまいに 呼応しながら
幻想する
宿痾の坩堝くわくに 響く
雨粒の音を 聴く
ひととき

(時ときが時ときのうちで熟成じゅくせいされるとき*1)

ふと

草花の 枝葉の 囁きに
耳を 傾ける

(花宇宙)と呼ばれる 時の滴り

舞台の舞人 姿態しざたいに宿る 超時ちようじにも

(花はこころ 種は態*2)

風薫り

樟樹くすのぎは 緑を 戦いくさがせる

公孫樹いちょうは 葉を散らし 黄金色きんごんの鈴を 振る

巷ちやうの 人と人とのあいだに 詩うたわれる

四季としの 移ろい

剩之 波動を 寄せる

星宿せいしやくの 耀かがよい

瞬時しんじ

宇宙空間うちうくうかんに

小面の翳かげりを 超えて

潜む

みえない 玻璃はりの光

に

註*1 時とき熱ねつはマルティン・ハイデガーの『存在と時』

のなかの用語

*2 花はこころ種は態むぎは『風姿花伝』第三問答条々

重力波 寄る年波や 雛洗ひなふ(雅代)

毒きのご殺人事件（今昔物語巻二十八より）

彼末 れい子

吉野の奥の長老は
八十を過ぎても元気で死にそうにない
七十になる次席の僧は
自分が先に死ぬかもしれない
早く別当になりたいなりたいと思うばかり
あれこれ考えあぐねた末に
一人で山に入り
ワタリという毒きのことを
どっさり採ってきて
夜の間においしい煮物にしておいた
夜明けを待って呼びにやった長老は
杖について喜んでやってきた
みごとなヒラタケをもらいましたので
召し上がってもらおうと

お呼びたてていただきました
僧はそう言って煮物を温めて
粥に添えて出した
自分だけ本物のヒラタケを食べながら
僧が様子をうかがっている
長老はパクパク食べて
食後のお湯まで飲んでけろっとしている
そろそろくたばるはずだが・・・
ちらちら見ていると
ウホホホこの年になるまで
こんなおいしいワタリは
食べたことがござらなんだ
はいごっつおさん
と歯のない口をすぼめて言った
知っていたのか

僧は這うように逃げだし
この毒きのご殺人は失敗におわった

ワタリ 和太利
夜の闇に光るツキヨタケの古い名前で
食後三十分から一時間ほどで
嘔吐 下痢 腹痛などの
消化器系の中毒症状がでる
幻覚痙攣を伴う場合もあるが
翌日から十日程度で回復する
毒成分は
イルジンS イルジンM ネオイルジン
長老はワタリの毒に耐性がある特異体質だった
このことは誤算だったが
普通の人でも死に至ることはない
いずれにしても
このきのご殺人は成功しなかったのだった

美術館にて

神田 さよ

自動ドアが開いて
一匹の蠅が迷い込んできた
唸りながら風景画に近づいた
新緑を風になびかせ
蛇行する河は
静かに雲と流れを同じくしている
蠅は首を傾げ
金色の額縁に止まった
空調の効いた部屋で
罅割れして
吊るされている絵画
穏やかな絵を描いた筆は河底に沈んでしまった
群れる蠅が奇妙なうなり声をあげ放置された屍体に
びっしりたかっている 屈曲した人の瞳孔や半開き

の口にも卵を産みつけている 瓦礫と化した薄暗闇
のタテモノに ここにも あそこにも 屍体 飛び
回り纏いつく蠅の一群 嘔吐する臭気 戦いは永く
いつまで 落下する爆弾 いつまで 落下する知性
混み合う会場で
前足をこすりあわせて動かない
一匹の蠅
学芸員は懸命に
追い払っている

コスモス

北岡 武司

ぼつねんとあらわれた星に次々と仲間が加わり
夜空に輝きだすと まうえに
オリオン座や北斗七星が姿をみせます
宇宙はこんなにも整然と動いていると
わたしたちに指し示すのです
あなた方の住む宇宙は
調和に満ち化粧けそうしていると やがて
明けの星のイマージュを残し消える夜空
ピユタグラスもケプラーもニュートンも
指し示しを解読し カオスを整理しました

不思議なことに宇宙は人間に解読できるように
みずからを繰り広げています
わたしも 父も母も息子や娘たちも
宇宙が繰り広げる一コマなのです
扉に咲いている朝顔も コスモスを隠す青空も

何もかもがその繰り広げなのです
その力をもってわたしは生きます
その力を受け ものみな生きるのです
ああ なにもかもなんと神的ディヴァインなことだろう
あの人もこの人も なんとかけがえないことか

それなのにわたしたちは戦をくりかえし
人を欺き 人を蔑み 人を虚仮にし
強盗の日々をくりかえしています
車を乗りまわし エアコンを使うのも強盗です
ソマリアの海賊にも一部の理があります
コスモスの麗々しさは昼間はみえません
大気に散乱する光にさえぎられ
恥ずかし気に姿を隠しているのです
人が自らの神性ディヴァイニティを知り 自由になるのを
待っているのかもしれない

さ わたしたちも急いで装いましょう
自由の地平へとあがるのです

雨後

北川 清仁

母の気配が感じられる
少年の日々のおもいででは やさしい
母の実家の座敷で
小三のぼくは麻疹で寝ていた
布団のなかから ぼんやりと
雨にぬれた六月の繁茂した
緑の迷宮のような庭を見ながら

病欠の快感！に 庭に溢れる生命
ぼくのところが溢れて
誰かに告げたい衝動に駆られた
母はいますさず

雨のクメールの森
白い花びら（その花の名を知らず）を踏みながら

死んだ女のようにくずおれた廃墟を
若い日 ぼくは歩いてきた
生と腐敗の横溢のさなかに
幻想の母よ
遠くから
あなたを呼ぶ声がします

秋のはじめに
雨がたくさん降った
雨のあがった空には
白い雲がゆるゆるとほどけていた
逝くひとは振り返るだろうか
たとえば過ぎ去った夏の山並み 宵の雑踏
さきに逝ったひと 昨日の日ざしなど
老いたるは母

もはやいますさず

空

限らないものを
さえぎる 青
内山さんは それを
「永遠」の色だという

注 内山さん… 内山興正師

時間

北野 和博

その人は古い木箱から
砂時計を取り出すと
テーブルに置いた
砂を閉じ込めたガラスの容器は
わずかな曇りもなく
私の顔を透明に映していた
息を潜めて見つめていると
その人は
そっと上下を返した
極細の光の糸となって
落下を始めた砂は
光を放ったまま
ゆるやかに積もってゆき
糸が途絶えると
ゆっくりと光を失い

砂に戻っていった
どれくらい経ったのだろう
私が尋ねると
その人は
永遠と言った

若い頃

北山 幸子

夫は若い頃仕事をいくつか変えた
住む地方も場所も何回か変わった
今は落ちついていているが
夫は「放浪した」と
冗談とも本当ともつかぬように
仕事仲間にいつている
ちなみに
私つまり「奥さん」は放浪中に
拾ったそうである

電車に乗って

電車に乗って出かけた
帰り二人共 立っていた
次の駅で席が空いたので
夫が私に
さあ 座わりと
手招きをした
夫はそのまま立っていた
すると
若い子連れのお父さんが
夫の肩をたたき
席を譲ってくれた
電車を降りて
ポツリと一言
「俺も席を譲られる年になったか」
六十六才二ヵ月
席譲られデビュー

福音

季村 敏夫

父上さま母上さま、いま戻ってまいりました。
南方の海のほとり、捕虜収容所を出て、
大竹港にたどりつきました。
われらの帰還、よき知らせをもたらすでしょうか。
復員兵から血の臭い
汚れた臭いが充満しております。
洗っても洗っても血は落ちない、
西の国の教えにはこうありましたが、
われらの帰郷、幸いをもたらすでしょうか。

なつかしい宮古まで向かえば
お姿は直ぐに探しあてることができましょう。
だが周囲の国びとがそらおそろしい。
なぜ戻ったのか、おめおめとなぜ帰ってきたのか、
大君の醜の御旗を踏みつけ、足蹴にした者、撃つべし、

敗亡の記憶をめざめさす者、この国に住むべからず。
そのようにおもうからです。

歓待を恐怖と受けとめねばならぬ復員兵に
やすらかな帰郷などあるうはずありません。
撃つべし、
みどりのそよぎの国びとの表情を
われこそは撃たれるべしと読みかえています。
おなつかしい父上さま母上さま、
すぐさま伺わねばならないのに、一歩も進めず
突堤で立ちつくしております。

●昭和二年五月、陸軍主計少尉季村淳一は広島の大竹港にたどり着いた。

細い路地の角に

工藤 恵美子

米軍は 原子爆弾を

一九四五年八月六日 広島に 八月九日 長崎に投下した

その直前の七月二十六日 模擬原子爆弾を 大阪に投下した
投下予定の富山が 雲で覆われていたため
ここ大阪に変更したという

戦後七二年目の二〇一七年八月 現地に立ちたい思いにかられ
地下鉄「谷町線「西田辺」に降りた 駅を出て西に一〇〇メートル
静かな住宅地の細い路地から 広い通りに入る角に碑が残る

模擬原子爆弾投下地

大阪市東住吉区田辺

一九四五年七月二十六日 午前九時二六分

死者七人 重軽傷者七三人 倒壊家屋四八五 被災者一六四五人

模擬原子爆弾は 長崎に投下の原子爆弾「ファットマン」と

ほぼ同一の 形状と重量の大型爆弾

原爆投下の時と同じように

目視で投下後 急旋回 急加速

原爆の爆発に 巻き込まれないための訓練

日本本土に 四九発が投下された

大阪 富山 新潟 福島 東京 静岡 愛知

三重 京都 山口 — — 神戸には四発も

日本中が空襲に曝された日々

広島や長崎が

大阪や神戸であったかも知れない

碑の建つ細い道の奥は

当時を思わせる路地が続く

広い車道のむこうは 田辺小学校

サッカーに興じる 子どもたちの歓声

※原爆搭載機も模擬爆弾搭載機も テニアン島から飛来した

みんな五月の光のせい

黒住 考子

葉桜の木下闇から
どっとおこる歓声

スローなダツシユ
危ういキヤッチ
セーフなランナー

遠眼鏡で見るけれど
空っぽのグラウンドは
ただ眩しくて

逃げ水のように
沸き上がる静寂

六月

琵琶山の六月は暗い

木下闇から とかげ
まぶしいほどにエメラルド色
ツツツ ツツツ
また闇へ

その闇から見つめるものの気配
くらさのあたり みつめかえす

おばけだぞー
白い布を被って
両の手を垂らして
宏兄！

歓声をあげて逃げる幼い従兄弟たち

遠い日の

逃げた従兄弟たちは戻ってこない
宏兄ももう二度と現れはしない

くらさのあたり
枇杷の実が熟れていく

太る

黒田 ナオ

からだの奥にある暗くてぬくい場所で
何かが太る
むっくり太る
生きてる私の内側で
まるまると胎児のように育っていく
下腹あたりが重くなる
眠たくなる 力がぬける 歩けない
もう立っていられない
なのにますます大きくなって
ぷすぷすぷすと
泡立っている
だるくて何もする気がしない
まだ昼過ぎだというのに
布団にもぐり込んでくんと
自分のおいを嗅いでる

発酵する からだ
におう
つんとしてにおう
ほんのり湿った
豊かな土のおい
汗のおいも混じっている
布団の中で 大きくうずまき
太りながら
湧き上がる

過疎の町でも夢はある

小杉 ヨウ

窓の外では、一つ山の側面が背景になって
もう一つ手前の山の稜線が斜めに刻まれる。
眩しいような光線を発する稜線から
微細な無数の虹の粒が垣間見える。
青っぽい山と緑っぽい山との重なり合いから、
民話に登場する樵の幻の掛け声が聴こえてくるような深刻なモノクロームが誕生する。
確かに漆を商品化まで導いた英雄は存在した。
養蚕は幾つもの集落を形成させた。
残った集落はその名残りで
多くは工場勤めなどをしている。
現況では、大きな資本を他所から持ち込まない限り産業は育たないのが定説で
資本形成を地元で遂行するには
競争が激化し過ぎて短期間のうちに疲弊して廃れてしまうのである。
流通のインテグレート（統合）をダイナミックに遂行する術を持たないと早晩廃業の憂目を見るのは
明らかである。

成功例がない訳ではないが飽くまでも個人的零細で貧富の問題を生じさせても
集落の救済には程遠い。
どこかにいい話しは無いかと人々の視線は
宙を泳いでいた。
それでもいくつかアイデアはあるようで
希望の光を秘匿しているらしかった。
明らかに夢を若者に託そうとしていた。
過疎の集落でも希望が無い訳ではない。
その頃滅多に見ない雄の雉が伴侶を探すためかが棲み処を移そうと頻繁に飛来する様子を見かけた。
しばらくすると落着きを取戻したらしく
山の中へと溶け込んでいった。

年の初めに

小西 誠

新しい朝
南天の赤い実から
したたる透明な雫が
凍った水色の空を映し
鋭利な刃物のような
光彩を放つ

静謐が漲る
あたかも穏やかな世界が
そこに凝縮されたような
年初の朝
それは錯覚であろうか
自然の摂理を見失った 僕たちの
たじろぎと戸惑いを
新しい朝は

気付かせてくれる

待つ という
時間軸を支えるのは
生きよ という
内なる声か
耐えよ ということでもある

いまだに
満たすことのできなかつた
父祖から託されたテーマを
次に 誰に託そうか

やがて小鳥が来るだろう
啄まれた 種子は
遠くまで
運ばれることだろう

手紙

佐伯 圭子

新しい年の 曙とともに
やって来る 白い紙
届けられる 四角いかたち
すでに凹凸を失くしたものが
臙に 距離を畳んで
届く

懐かしさが 胸郭を締め付け
背骨を揺さぶって来る

秘密の葉っぱや

はかない色に滲む

水滴

日々 わたしは

横のものを縦にし

たてをよこにし

手帖

ナナメにし
切り 絞り 干し揚げ
何気ない姿で
生きているわ
ふわりとした衣で
想いの蛇を包み
春の苔に 気の粉を
振りかけている

ぴったり閉じたものに
挟んだまま ながい年月が経った
けれど色褪せずに 今も

さらに色濃く

視野に迫り 時には臙に

わたしの目の虹彩をにじませる

褥に眠る手帖

虹に包まれて

袋のチャックは閉じられて

少しの空気を出し入れしつつ

年月を重ねている

湿っぽい暗闇の中に

着物を着流しにした父が

寂しそうに立っています

わたしは思わずその場に

しゃがみ込んでしまいます

旅立ち 二十歳の

わたしは林の中へ這入っていきます

空色の旗をかかげて

まだ誰にもふれたことの無い風が

わたしの隠された肌に刺し通るのを願いながら

そこは原始の林です

黒い土の上に立つわたしの下で

激しい川が流れます

ふと目を横に向けると

わたしは黒い土を抱きしめます
すると目に涙がいっぱい溜まるのです
こんなに想いが深いものだなんて
太陽がまるで初めてふれるような激しさで
こちらに向かって来るのです

重なりあった物語が
わたしを熱くするので
孤独な絶叫を
こらえ切れないのです

ふるさとの声

佐藤 勝太

古里の山の風
懐かしい向かいの山の松風の音
古い友や知己をすでに亡いが
聞こえる音は旧友たちの声

時折り聴こえる裏山の鳥の声
前の山からの鴉の聲が
懐かしく呼んでるような
ふるさとの声

何時の日

また帰って来られるか
本人も判らないが
生まれ育ったふるさとの家は
朽ち果てているだろう

庭先の道

わが家の庭先に咲く
路傍の草花が今年も花を付けて
通行人にも誇るように
笑顔で見送っている

道草を踏みながら歩いて行くと
左右の木々が触れ合い
小鳥たちが笑ったり争ったり
賑やかなひととき
道行く人も立ち止まって眺めていた

机上の落書

机上には詩は心を描きその心を
言葉で表現するとメモされて
記されていた

もう一つのメモには一度だけの人生
やるべきことをやり遂げて
おさらばと雑文が書いてあった
いずれもその時々のお持ちの断片を
記したのだが最後には
笑門来福と書いて自嘲していた

桜守

坂本 久刀

朝日の矢を浴びる初桜
山腹の花の道を巡る
心のときめきが治まらず
声をかけると
老い桜に夢も希望も住んでいる
漲る気を貰い命が新たとなる
花に鳥声人語の
わが良き日よ

一月の
桜守ボランティア自治会で
五百本に接する
草取り、肥料、切口の手当て
剪定は声をかけて貰う
先人の仕組みの良さが生きている

一本の枯れ木が倒された
後悔と惜しむ気持ちちが湧き
わが残世を思う

緻密な碧空に
淡い淡紅の老い桜
咲くも散るも一気
着地を目指している
遅れて咲く八重桜は
宵化粧にいそしむ
桜という
まぶしいもの

オムニバス

佐野 博美

ガタガタゴトン、ガタガタゴトン・・・
踏切を電車が通過する

カンカンカンカン・・・
警報機が鳴り続ける

遮断機が上がり

いらいら待っていた車の群れが、轟音を立てて走り始める

くりかえされる生活の音

「開かずの踏切」で有名だった

今は線路も高架になり

一本ごとに長くなって、継ぎ目が減った

電車はクールにスムーズに走り抜けていく

踏切が消え

遮断機の音が消えた

そして、くりかえされていた生活の音も消えた

世間はそんな感慨には関心もなく

車の騒音だけが残った

わたしはむつつり黙って病院の待合室にいる

混みあつてはいるけれど、他人に関心のある人は

ほとんどいない

ただ自分の順番だけを待っている

患者とは、自分の痛みに執心する者

まるでヒーローのように

彼の痛みこそ誰よりも大きい

孤独の時計がチクチクと白い音を刻んでいる

更地に「売地」の看板

誰が住んでいたのか、どんな生活があったのか

どんな樹や花を植えていたのか

どんなペットを飼っていたのか

覚えている人はひとにぎり

人は去り

あの頃の生活の音も消えて

今はからっぽの更地にすぎない

それでも人は群れて生き

明日に向かおうとしている

この座標軸がぶれたとき

愛する人の生活の音が消えたとき

「OPEN」の看板が「CLOSED」に変貌したとき

心の穴を絶望の風が吹き抜けていく

さくらちゃん

在間 洋子

公園が増えるばかりの野良猫を
どうしたものでしょう

なんでも 年に二回お産するそうですし

近隣からの度重なる苦情に

自治会で諮りますが

よい案が浮かびません

〈猫に餌を与えないでください〉と

回覧しても 立札を増やしても

ひそかに餌やりに通う人が絶えません

と言って 捕獲して処分するのは

あまりに可哀想でしょう

よい案がありました

猫の不妊手術です

寄付金とボランティアを募りましょう
手術済みの猫を見分けるには
耳の先をチョンと切り取っておきます
桜の花びらの形に
題して サクラネコ作戦です

わたしたちの街の公園猫は
サクラネコのさくらちゃんになりました

もう 猫たちはおなかを空かせることはない

もう 餌やりに通うおじいさんも人目を気にすることはない

もう わたしだって見て見ぬふりをしなくてよい

幸せな猫たち

幸せなわたしたち

さくらちゃんとわたしたちの

楽しい

いま

階

紫野 京子

階を上ると
明るい光に満ちて
海が見えた

そこだけ 空を切り取ったように
四角い空間が広がり
どこまでも透き通って

そのまま 果ての果てまでも
歩いて行けるような気がした

ジェームス・タレルの空を
ふと思い浮かべて
あの時も海があったと
「青」を懐かしく思い出した

それが空の青か 海の青か
わからなかった
ただ どこまでも突き抜けて
透明だった

きっと心もこんな色をしている
でも透明って何色かしら

重ねても 重ねても
どんな色にもならない ころろ

ここにいないことと
あそこにいることが
そんなに変わりはないような気がした

どこにでもあって どこにもない
私は在って 私はない

ゴルフセンター

柴田 実

五番アイアンで打った球は
きれいに当たり
まっすぐな線を引いて飛ぶ
白い球がスーッと
夜空に吸い込まれていく様は
魂が飛んでいるようだ
同僚のことを思う
私のそばを
消えていった日があった
横風の吹く日も
晴れの日もあった
と言ってやりたい
打たれたボールは
抜け殻のように
青白く

夜行灯に照らされている

「蜘蛛の糸」再考

鈴木 豊子

むごいおひとどすなあ
おしゃかさんいとおかたは

いざとなったら
おのれひとりでもたすかりたいのはほんじんのつね
ましてかんだたはきだいのあくとう
たったいっほんのくものいとに
あおじろくよわよわしくふるえている
いっほんのくものいとに
したからいっばいっばいすがって
のぼってきてるんみたら
「あかん」とどなってしもたんも
むりからぬはなし

それをなさけようしゃのうぶつつんして

かんだたはまた
ちのいけへまっさかさま
いっぴきのくもたすけたために
かんだたはんはにへんも
むごいめにあわされはった

—ONDORYA WARYA OCHOKUTONKA BOKE—

そやのにごくらくはなにごとものう
たまのようにしろいはすのはなが
ゆらゆらどうてなをゆらし…やなんて

ほんまにおしゃかさんがそんなおかたやったんか
それともこれかいたさっかのおひとがすかたんやったんか
それともわざとそんなごくらくひにくらはったんか
ようわからしませんけど

シグナル

関
はるみ

全身で発したシグナル
どこで混線

菅笠を被って山路に中腰で立つ
妖しい薄緑の反射
幾筋もの襷を笠裏に潜ませ
震えている 光る茸

闇の中にほのかな光
あやしげな術で惑わす
点滅のパターン
以心伝心に戸惑う
源氏螢の恋人

青白い光が昇ったり降りたり

田筒水槽の中は無音の騒がしさ
柔らかな無力感 毒の触手
オワンクラゲは
青から緑へと色を変える

目的地は遠く
干からび変質してゆく光
今日もどこかで屈折する
届かない時間
光の気配

おおるり

高木 敏克

森が見えなくなったのは森に迷った証拠だ。木の影に古い記憶が潜んでいて、静かにこちらを窺っている。亡くしたものを捜すときには森に迷えばよい。むしろ少女はねむるように森に入ってしまったのだから。

激しい大瑠璃の音が飛び交っている。この森はもとと畑地に違いない。青い苔の下に畦道の跡が残っている。このあたりは段々畑に違いない。しばらく歩くと苔むした大木の向こう側に陽だまりになった小さな草地が見えてきた。あるいは、それは森に住む独り暮らしの老人の自家菜園かも知れなかった。そこだけが光に満ちていて、白い帽子の少女が大きな昆虫採集の網を振り回しながら飛び跳ねている。

遠くから呼ぶ声が出ている。ところが少女は背中を向けて決して振り向かない。その声は森のもっと深いところから聞こえてきた。少女は降り注ぐ金色を通り抜けて不思議な時間立ち止まった。

草原の中に影の青いバンガローが現れた。白いドアが開くと中は真っ暗で瑠璃色の夜空に抜けている。見とれていると、鳥の羽が彼女の肩をたたいた。振り向くと、大きな老人が立っていて、腰かがめて顔を寄せ、闇を覗き込んでいる。

「だめだわ。この中、本当に真っ暗よ。何も見えない」

老人はゆっくりと頷きながら中に入り瑠璃色の中に消えた。

消えた者には語りかけるしかない。夢の中で無条件に物語りを追いかけるのはそのためだ。生きている限り見えないところでは止まらない物語りが続いている。

森の中では夢が迷路を案内する。内部の物語りは終らずに死ぬことがない。

また大瑠璃の激しい声が聞こえた。少女は梢から落ちてきたラビスラズリを二つばかり拾ってみた。柵の枯葉がカサカサと音を立てていた。その裏では水を含んだ重たい葉が静かにどす黒く消えていく。

再び森が開け、日溜りの中にあの老人が現れた。枯葉が輝いていた。瑠璃色の老人は枯葉の中から何かを掘り出していた。盛んに鍬を動かしていたが、無駄のない老練な身ごなしに少女は見とれた。

「ほら、言葉だよ。お前さんの探している言葉だよ。手に取って見てみる。この当たりの土は、すべて言葉が死んで出来たものだ。死んで腐る土もあれば、どうしても腐らない土もある」

そう言いながら、老人は大きな土塊を鍬でほぐしていた。

「こうやって、死にかけて言葉は時々掘り返してやらにゃあならん。そうせんと、わしらは本当に眠ってしまうんじや」

「でも、わたしはもう眠っていると思う」

枯れ葉の中でラビスラズリがまた光った。

すいくちつつみ

高谷 和幸

竹に

むらと

さいのむらに

見えない竹と

どこか、かしこ

伸びていく

こらえ、かむる

このせかいで

まっすぐではなかったから

刈り取られずにすんだ

孟柱津知唐嫋紵 (takeha tutikara taouakami) まがれ

今日は

男と女のむらと

竹をよじのぼる

タ・タ・プ・オー

「むらと！」

ひとつのものになるのだから

たち、あいだのまに

輻がやぶれる

胞子がふきこぼれ

注がれた月は

その月の裏におかれた

沼から沼

たかとう 匡子

もう幾日になるだろう。断続的に激しい雨が降りつづいて、風も大気を騒がせつづけて。ざわめく樹木のあわいにも、ひろげた指と指のVのあいだにも、今日だか明日だかわからぬほどに行き来するので、せめて寝室に戻って落ちつきたい。わたしすっかり空洞になつてずり落ちてしまっそう。

窓からひよいとのとぞくとあたりは沼になつていた。となりの家もむかいのアパートもぼかりぼかりと浮いている。昨日だか今日だか、もう幾日になるだろう。さつき窓のこちら側からのぞいたときはくるくるくるくる、わたしの庭は大荒れのまっ最中で百日紅は輪になつて踊り狂つていた。

その百日紅がない。消えたかあるいは連れ去られたか沈んだか。これはよくない兆候だ。警笛みたいなうなり声が出て、体が浮きあがつたそのとき、遠くからかすかな声が聞こえた。出ておいで、とだれかが呼んでいる窓ガラス越しに。来る日も来る日も降るこの雨、先の見えないこの世界。

出ておいで、出ておいで、こんどは何人もの声が出て、わたしは不思議な声に動転しながら、いつのまにか握りしめていた棒切れのようなものをむやみやたらに振りまわしていた。なんだかわからないままわたし、くすんだ記憶の裡にもぐっている。水面を渦巻きになつて浮遊している。

雨風はいつそう激しくなる気配。地上ごとくふぶいているから、昼と夜の境界線を突破するのは並大抵ではない。わたしの家も商店街も国道2号線もぼかりぼかり。沼は重さに耐えきれなくて膝をついた。それは新しい諧調のはじまりかと安堵したのもつかのま、わたしの半月板割れた。

川の音

高橋 夏男

この川ではない
ずっと遠くの
たとえば
ふるさと と呼ばれる
そんな彼方の

さらさらと砂が流れる
澄みきった浅瀬の
苔なんかも生えない

静かに
しかし さやかに目に見え
動きをやめない
そんな底から

遠い下の方から

川が音をたてる

それが
聞こえる歳になった
ふるさと と
つぶやいてみる

夢の底で

高橋 富美子

くびれてきたね
声がする
橋のまんなかにオレンジの夕陽
海べりの道を友達が歩いている
あら こんなところにいるの
思わず大きな声で叫んだら
少年のように痩せて死んだひとは
ふくよかな顔立ちに戻っていて
困ったように肩をすくめて消えていった
岸壁の突端にたどりつく
風に背中を押される
髪が逆立って
あらがうわたしはきつと鬼の形相

荒れ狂う波の手に引き込まれる
海の底には
腕組みした
幾千もの鬼たちが
この地球の怒りを抱いて
ひしめきあっているのだ
夕陽はふたつ折れになり
ひしゃげた釘の形
つまんで海に投げ込んだら
じゅつと音がして
たちまち世界が昏くなる

ゆうまづめ

泥んだ茜色の空を
いましがた
犬やネズミや恐竜
化け物などが渡っていった
列を離れた
喋りたがりの鳥が
嘴で窓をつついて
何かが墜落したと教えてくれる
タグボートの軍団に先導され
黒い覆面の舟が
動かない速度で浮かんでいる
完成しない詩をまえに

乾いたボールペンが
部屋の隅でキキコと啼いた

ぼくが子供だった頃 たかはらおさむ

ぼくが生まれた年
世界戦争が始まった

日本海を隔てた東方の大地
朝鮮 中国 東南アジアで
天皇の軍隊が

「アジアの解放」を旗印に
殺戮を繰り返していた

僕の記憶にあるのは
夜敵機に狙われないため
室内の電灯を黒い布で覆う
「灯火管制」

爆撃機の襲来を知らせる

「空襲警報」

けたたましいサイレンに混じった声

「クーシューウーケーホーハツレイ！……」

頭を保護するのに被る

「防空頭巾」

警報解除まで潜っていた
防空壕

不気味な轟音を響かせて飛ぶ
B 29の編隊

空襲を連想する地名は

紀伊水道 熊野灘

そういえば

夜空を飾る夏の風物詩

楽しいはずの花火大会は

ぼくには恐怖の記憶

ブルーブラックの空間で開く

火の造形は

闇を照らし降ってくる焼夷弾

火花が弾ける音は

高射砲

ぼくが子供だった頃

自由に飛び回れる遊び場はなかった

そこは芋畑や防空壕になった

伸び伸びと遊べる時間はなかった

いつ空襲警報が発令されるか不安だった

登下校時飛行機を見ると

指で目と耳をふさぎ

急いで凹地に伏せた

そして こんな歌を歌っていた

「ボクハ軍人大好きダ

今ニ大キクナッタラバ

勲章ツケテ剣下ゲテ

オ馬ニ乗ツテハイドウドウ

」

何も知らずに無邪気に

兵隊さんが英雄だと思って

小学校一年の夏

八月十五日

その日から轟音もサイレンも止んだ

静かな毎日が

あの日から

そして七十年

それから

戦場で殺し殺されることなく

時は過ぎてきた

だが 軍靴の音が聞こえはじめ

ついに 後方支援

そして 武器輸出

異国の兵士が戦地に出撃

たしかに列島に戦火はないが

「敵」の標的になった

今 この瞬間にも

海の彼方では

空爆が毎日繰り返され

砲弾が飛び交い

血が無駄に流され

女や子どもたちの生命が

罪もないのに奪われようとしている

ぼくの子供の頃のように

あの時代を再現しようというのか

ぼくの子どもの時代が

忌まわしい光景となって蘇ってくる

あれは亡霊だ

朝の音楽とは

田中 信爾

白い紙の上のペン画
右側に二つの建物
その輪郭の直線
その前の道路
車の流れ
木々の緑
枝々の曲線
そこに
人の影が足りない
と僕は思う

朝の音楽は
バッハのヴァイオリン・ソナタにしよう
と思う

枯葉をはりつけると

白い紙の上に
枯葉をはりつけ
黄色いインクを落とすと
一つの形が出来る

枯葉は
海の中の二匹の化石魚となって
白い紙の上を泳ぎ続けるだろう
昼も夜も――

妻に就て

田中 莊介

一人の少女を妻として迎えたときわたしはほとんど妻について知らなかったと言っている。すこし勝気で若さに輝いていてわたしはその姿態だけを見ていた。妻はわたしに対してときどき意地悪になる。それはわたしが多分少しばかり威張っていたから。妻にも意地のあること発見。妻は高望みをしない。何事にも。私は着物一枚プレゼントしたことがあっただろうか。妻はがんばり過ぎる。父親に似て弱音を吐かない。苦しみを大げさに言わない。小さないさかいは何度も繰り返す。時には旅に出たりして妻はいつも傍らにいて夜は無防備に寝息をたてる。歳月はあつというまに過ぎいま妻は長期入院で隣のベッドは空。

ぎっこんばったん

昭和の初めころ商売繁盛して二百坪ばかりの屋敷を建てた祖父。十帖四間の境の襖を取っ払って大宴会をした。花街の女将や芸姑を招いて京都花街まがいの大盤振舞をした。襖の陰から客と芸姑が首を出したり引っ籠めたり。硝煙の匂いがどことなく立ち籠め始めていた昭和の初めのころ。祖父と二人だけ家居のとき祖父と座敷で向かい合ってぎっこんばったんとうじゅうろうの遊びをした。着物の細い胴紐を輪にして互いの首にかけ互いの首を引いたり押し出したりいつもまでもいつまでも。(とうじゅうろうとは何者)。祖父母がよく歌舞伎に連れていってくれたというがほとんど憶えていない。幽暗の彼方にぎっこんばったんとうじゅうろうの微かな音声が尾を引いて余韻のように消えていく。

※「藤十郎の恋」という芝居がかかっていたとも。

舌

武内 健二郎

仄暗い地下通路の
遠く

正面で光っている

誰かを待ち受けるような女の
顔

真紅の唇

純白の歯

口角からしずかに
文字がこぼれた

BVLGARI

女は微笑みながら
私の舌を操る

他人の舌のように
奇妙によじれ

女の声が
私に伝わる

ぶるがり

純白の歯の裏側で
女の舌がうねる

るり
るり

くらがりでをめぐり
ずれながらつながっている
耳たぶに覚えのない傷がある
噛みちぎったさかむけが
人さし指をむ
の爪がのびるといのはほんとうらしい
髭ものびるよ
ふともらした
つぶやきが
ピクセルの微細に
隈どられ
25 本心に幸せな人は自分を犠牲にすることなく人を幸せに出来るんですね
呆けて鳥が二度ないた
ガチであれガセであれ

是々非々なくヤバイのだ
なんにも不自由がなくて幸せなのにどうして不安なのだろう
掌中で
弄ばれる
レアなもの
だれかとだれかでないだれか
夜の底を
這う
水音
した
した
した
した
ひと
は
死
ね
ない

パパを待っています

玉川 侑香

廃墟 と言うな

旧日本陸軍の野戦病院跡

高々と天をつく パンの木の下に立って
あなたは ここで
パパを待ち続けている

激しい空襲が続きました
銃弾で傷ついた兵士たちを
パパはベッドへ運んでいきました
私は包帯や薬をもって 手伝いました

来る日も来る日も
たくさん兵士が 死にました

終戦になって

私とママをおいて

パパは日本へ帰って行きました

日本人孤児と ひとと呼ばれます

必ずパパは帰って来る

ママはそう信じて 死んだ

パパがアンボンへ帰って来るなら
ここ

ここが唯一の パパとの絆

廃墟 ではない

72年の歳月が 建物の形を変えていっただけ

日本からの遺骨収集団がくれれば
そこにパパの姿をさがし

観光ツアーが来れば
パパの消息の手がかりをたずね

たくさん手紙を日本の新聞社に出しました
旅行社とも仲良くなりました

日本・インドネシア友好のバッジを胸に示す
ミスター シバタ

あなた自身がとくにパパとなり
孫たちに囲まれる賑やかな暮らし
それでも胸の空白は埋まらない
野戦病院跡の隣に 住居をつくり

私はパパを待っています

人は誰でも

田村 周平

人は誰でも過去を取りもどして
もう一度生き直すことができる
君の母さん言葉を君の娘の声で聞いている
不思議な時間だった
脳出血でたおれてからずいぶん時間が流れた
左半身は不自由だけれど
まだ残っている言葉と記憶をたよって
ぼくはもう一度生き直すことができるだろうか
四ツ谷駅の階段から降りてくる白地に紺の水玉模様
腰に細いベルトのワンピース
阿佐ヶ谷の駅の伝言板に周平帰れの一行
ぼくは帰ったと書き直して部屋に急いだ
H・Iという作家にあこがれて東京へ出てきたのに
鷺ノ宮から中野までよく歩いた
という文章に出会ったのはずっと後になってから
ぼくが歩いたのは鷺ノ宮から阿佐ヶ谷

街道が一本ちがっている
二十歳のぼくの記憶は残っているのに
駅の伝言板は消えてしまった
伝言板がなくて
恋人達はどうやって出会うのだろう

久しぶりに街のコーヒー店で
文庫本を開いている
二回目の静かなドン
近くの席に高校生も文庫本を開いている
たぶんガールフレンドを待ちながら
彼のこの日の記憶は
とるに足らない一日のひとつかかもしれない
人生がとるに足らない一日のつまかさねだとしても
もう一度生き直すために
なくてはならない一日だ
夜中にウイスキーを飲みながら歩いた日は
ぼくの最高の一日だったかもしれない
それが二十歳の最初の日だったという理由だけで

へそで茶を沸かす

張華

信用しなくちゃいけないよ
だけど今日はいそがしい
茶を沸かすところは見せられない

おにいちゃんに まけないよ

信用しないのかい
そこで笑っちゃいけないよ
僕のへそは特別で
茶を沸かすぐらいできるのだから
人にはそれぞれ能力がある
君にもあるだろう
僕が知っているのは
人が欲しくないものを
高い金額で売る能力
みんな他人が悪いのだと
人に責任を転嫁する能力
君は顔では笑っているが
腹の中はどす黒い
僕の知っているだけでも
こんなに君は持っているのだから
僕のたった一つの能力の
へそで茶を沸かすのを

拳をふりあげて
かかっていったのに
僕の拳はとどかない
力いっぱいなくったのに
おにいちゃんの腕でとめられて
おにいちゃんの身体にとどかない
たった三年遅く生まれただけで
僕はおにいちゃんにかなわない
僕はあるの娘が好きなのに
あの娘のスカートを捲ったおにいちゃん
僕がしたのではないのに
僕を睨みつけているあの娘の瞳

だから僕は見てしまった
おにいちゃんのせいだから
しっかりパンツを見てしまった
あとは興奮して僕はチラチラ
チラチラ眠れない
おにいちゃんは優しいところも持っている
おやつを買って僕にも半分くれたけど
どうみてもおにいちゃんの方が多かった
僕もお小使い出したのに
僕の家はお金がない
いつもおにいちゃんのお古を着て
おにいちゃんの服は新しい
うらやましいけど僕はだまってる
僕はシクシク泣いている
くやしくて誰にも聞こえない
はなれたところで泣きじゃくる
おにいちゃんが悪い
誕生日
僕も一つ年増えたけど
おにいちゃんも年増えた

あの娘は今でも知らんぷり
ちらりと見ては
よそへ行く
僕はなんにもしていない
だけど僕はきらわれて
クイッと僕は髪を掻きあげる
イキがって歩いている
おにいちゃんのまねをして
玄関のくつは僕のくつより
大きくて
食事の肉は僕の方までとってしまっ
アツという間もないくらい
僕はきつと大きくなって
おにいちゃんにまけないように
涙の数だけ決心しよう
そしてそして大きくなろう
そしてそして大きくなろう

藤色

月村 香

つる草の万年筆にからめば地色と二つの対照の色が激しく個性でありそのまま帯留にしたらもう手放したくなくなるよなかわいのお石のよな暗いお部屋の中にいるよな昔物語光のさして決してくずれず

そこるところから

帰り道によく寄る紅茶屋が見えてくる
ついで眠る前のマティーニが
ろうそくを持った廊下をわたる
腰が痛い
携帯はゆれても手をふれない
部屋の新しい照明は
ゆっくりと消える

足を伸ばさなければ死んでしまう
夕べの本

わたしのp.c.
いつかほぐさなきゃいけない雑草
そしてまたマティーニが
一気に飲み干すロックが
あなたの好きなミュージックが
看破らなければならぬマジックが
さつきから飲み続けている頭痛薬が
たとえばこの世のために詩を書けと
言われても
わたしにはできない
そんなこと
たとえば今雨が降っていることとか

落下と飛行

寺田 操

もう充分に生きたのではないか そんな声が聞こえてくるのだが そのからだは白い繭のなかで一日中眠りつづけていた 樹木の奥から澄んだ鶯の鳴き声が夜明けを告げる かさなりあった山脈の縁には赤い紅が南北に引かれ 障子に光を編みこんでいく 十三階建ての高い塔のパラポラアンテナの上に飛来したカラスは 今朝も不気味な声をあげながら旋回すると 幼稚園児たちは小鳥のようにさえずりかえしながら 坂道を登っていく 蒼空めがけて飛行機雲が描かれるころが正午だ 誰もいない公園では鉄棒があくびしている 学校帰りの子供たちが公園で遊び疲れたころ 逢魔ヶ時が忍び寄る 今日には誰をさらっていかうか 灰色の影たちがバスを降りて 坂道にさしかかる 月明かりが眠る駐車場を灯して 夜がふけていく

陽の移ろいは早い 眠ったままのからだだが茶碗と箸を手にする 胃袋のなかに豆スープが流しこまれた 薬缶がしゆるしゆると音をたてる お茶をいれなければと立ちあがった背中には誰だろう ぼたりぼたり 水道の蛇口から漏れる水音を聞きながら 梅干しをひとつ口の中にもりこむ 洗い物がすめば ソファに直行だ からだを横たえてTVニュースを見る ネオンの海ではヒト科の一群が雛壇に並び 金魚の口を開けて泡をふきだしている かすかからだは反応するのだ

が 眠っていることには変わりがない 浴槽にからだを沈めて髪を洗い流し 突起した時計の針がチクタク 死と生とをチェンジさせると 布団のなかに横たわる 午前一時 不眠症の男は食卓テーブルの上で 活字を追って紙面レイアウトの真っ最中

眠りつづけている脳髓のなかに 桜の蕾が芽生えるなんて 何と残酷なことだろう 枝先には小手毬のようにまるまった花びらたちが パッチリと目をあける なのに いっこうにからだは起きる気配はない 夢が終わるのが怖くて きつく瞼を閉ざしているのだろう 桜並木をおおぜいの人が歩いている これは昨日の出来事のようにだ 笑うベビーカーの幼児 ベンチで喋る若い母 攫われますよ あなたの 赤ちゃん 弁当をひろげている夫婦 シーソーで遊ぶ子ども 対岸の広場では太極拳にいそしむ手足 集合場所がみつからないと泣きだしそうな二人連れの老女 つないでいた男の手を離し 川面に沿ってまっしぐらに歩いてくるシルエットは どうやら わたしのようにだ 素知らぬ顔で擦れ違い 早足で上流へと歩いていく

急カーブの線路の手前で川岸の階段を下り 川中に置かれた石の上で電車を待つ 無数のカメラが待機する中を 桜の花びらを揺らしながら 電車が通過する いつのまにか わたしのからは消えていた 眠っているうちに雨が降りだしたようだ 桜の雨 さくら 桜雨 さくら

くすくすわらいする山羊のそばには
いつもちいさいひとがいる

作り話が得意で

次から次と話を紡いでいくものだから
それで大きくなれないのだ

でも それをやめてしまうと

だんだんちぢんでいって

おしまいは けむりになってしまう

といううわさもある

いやいや それもちいさいひとが作ったおはなし

くすくすわらいする山羊のそばに

人のひとりもいていいはずなのに

山羊だけに聞かせるのもつたいない

山羊を柵につないだ人はどこへ行ったのかしら

ちいさいひとにはとても山羊は引けそうにない

それでも

ちいさいひとは

山羊のために話を紡ぎ

山羊はくすくすわらっている

そんな一年十年百年千年を生きている

ふいに

おまえはだれ という声があった

わたしの耳の奥の森の入り口の方

たしかにそれはちいさいひとの声

『おまえはだれ』 と呼びかけると

『おれはその山羊のあるじ』

おまえがちいさいひとになるまえのおまえだ』

山羊はくすくすわらい

ちいさいひとは

次の話をするために必要なあたらしい息のように

すこしふくらんでいる

観察眼

内藤 富美代

夜が明けかけていた
カラスの不吉な鳴き声

ここまでできた以上
もはや泣き寝入はできない
激しく憤り
度を超えている

ゆがんだ性癖
陰湿な罟を仕掛け
私を破滅へと追いやった
そんな奴には
罰を与えなければならぬ
追及は自力でやる
予感どおり殺されるまえに

誰も
その事実気付いていない
直感的な根拠
動かぬ証拠
確度の高い事実として

さくら むる

中堂 けいこ

むる ねむる 桜のそめちるよしの といひ
ちよいと花をみでくる とそのまま帰らぬ父が
ことしの桜はどおよ わたしの手をひき だら坂の満開をとおりにぬける
ひとしなみクローンなのだからみなおなじに描いてよろしい
消しゴムを凸三角にけずり四六判いっばいに
さくら むる おしつける凸のこまこま銀紅に杏仁を少し
おお いくどいくど 年ごとに むるる
もう描かなくてよいと
坂道はえんえんとくだりをつづけ
パパ と幼いわたしの声がして幼子が男の首に腕をまわしている
小枝を耳にさしりコーダーを吹く人がすわっている
遮断機のまえで見上げる人がいる
地平にぼんやりとひとしく
かすみたつ 夕暮れ
ちよいと花をみでくる と

そのまま帰らぬ父は むるるひととなる
桜の根方に人々が整列し
もううたうな

おのれ生え 1

永井 ますみ

うちの庭には畑がある
といっても二坪ばかりのささやかなものだが
ここが新興住宅地で家を建てた昔
庭を掘って石を取りのけ
土の中に埋めごまかされたものを取りのけた
より細かな土を山から取ってきて入れたり
野菜の土と称されるものを
何袋といわず買ってはその空き地に入れた
土代、肥料代、野菜の苗代膨大な汗
この四〇年ばかりつぎ込んで来たのだ
抜いた草を袋に詰めてゴミに出すなんて
刈り払った枝を束ねて生ゴミに出すなんて
下町育ちの夫の循環しない生物を奪い取って
火を放ちたい
火を放つことで土壤の浄化が図れるのに
今や庭で火を焚くこともならんだ

このところ好評につき
春にはトウモロコシを植える
夏には冬の収穫のために大根を植える

春と夏の間がおのれ生えの適期だ
いつか食べたジャガイモが芽生える
腐ったと思つて放置した里芋が葉を延ばす
黄色い花を振り立てて
南瓜の蔓がフェンスを乗り越える

おのれで勝手に芽を出しましたゆえ
おのれで勝手に枝を張りましたゆえ
おのれで勝手に蔓を伸ばしましたゆえ
おのれで勝手に稔りますと
椿の葉の間から南瓜がまるい顔を出す
キュウリがつやつやと堅い腕を伸ばす
知らんのか
自由を食べて大きくなったおのれ生えは
格別うまいのだ

おのれ生え 2

黄色い花を振り立てて登った庭の木の上で
大きな南京が実った
ぶらりと吊り下げた灯りのように
橙色の南京が実った
ほらね、あれがおのれ生えの南京さ
植えもしないのにぐんぐんと逞しいね
賞賛を受けて取り入れられ食卓に上った
秋風が吹いて枯れた蔓が刈り取られ
小さな庭には
玉葱とニンニクがちんまりと植えられ
畝を立てて大根が蒔かれた
ほう もう双葉が出たね
今晚のお浸しにしようか
主の声がする

私はというと

庭の木の股にあぐらをかいている
夏の陽に煽られ
秋の冷たい風にさらされた
尻のあたりをナメクジに囓られた
ナメクジは意外と固い歯を持っていた
続けてコオロギが住まいした
もう奴らはどこにも居ない
痛いとか淋しいなんて叫びはしなかった
何しろ 私はおのれ生えだから

ああ こんな処に南瓜が
主の素っ頓狂な声も どこか遠かったのだが
皮の色も白く灼けて固そう
囓られた尻から種が覗いている
勿論食べるわよ
食べて 種を埋めておくわという声を聞いて
泣きそうだった

泣きそうだったよお

断捨離

長岡 瑛美

砂時計が壊れました
粒子が飛び散って
チャレンジから三日して
砂場みたいなざらつきです

ねつとりと砂の一色
凹凸が消え
つかみどころがわかりません

モノたちは
〈いつか〉〈また〉を呪文に
時の底にしがみつき
あちこちに長針や短針を潜ませて
忘れるなど刺してきます

痛いと思えば
おが屑じゃないと叫び
平手打ちをすれば拳を返すのです
湖面に氷の花が散るような
しずやかで潔い響きですのに…

断ち、捨て、離す
いまだ言葉との距離がはかれません

ドライブ——二時間で行ける所へ

中川 道子

行動半径が狭くなり
ほっとする風景には程遠くなっていた
山並みをいくつも越えて走る高速自動車道
時折トンネルに遮断された樹々たちは
再び新鮮な息吹きでひろがってくる

ドライブの誘い

行きたい所はどこ？からはじまり

もう一度行きたかった所へなど

時にはさまがわりした事物にとまどったり

しみじみと再会の喜びをかみしめる時は

今日在る事に感謝が湧きでる

緑の裾野には
谷間に光る集落

霧のかかる山々
竹林のざわめき
ほっこり咲いている小花の群

「お母さん着いたよ」
シートベルトをはずし
ドアをあける

はじめての地は
まぶしい

介護する人

中島 友子

先生にお願い

語気を強め
誇りを傷つけることを言ってしまう
自己嫌悪で動けなくなり
ズボットと落ち込む
髪がパサパサになり
目に悲しみと疲労が浮かぶ
それでも
認知症の家族を介護する人は美しい
揺れながらも
迷いながらも
守ろうとする強い思いが
目の奥にある

応えられなくても
認知症の人に
ゆっくり話しかけてください
体をさわって
こわばりなど診てください
本人の前で家族に
できないことなど尋ねないでください
本人も家族も
心がくしゅんとなります
二人とも心も体も
うつむいて帰ります

大きなあたたかい手

同朋

11歳の少女は
母親が「施設にいるおじいちゃんに会いに行こう」と言うと言われ嫌がる
しぶしぶ行くとふてくされたように涙を流す
母親は
「おばあさんたちに人気のある弟たちと違ってかまってもらえないから」と言う
祖母は
「おじいちゃん 大きな手でつつんでくれて新幹線で送ってくれたよね」と言う
だから嫌がらずに会いに行つてやつてという祖母の思いを少女はわかっている
だから涙が出るのだ
あの大きなあたたかい手を忘れていないから涙が出ると言うことを
母も祖母も知らない

大好きだったチエックがらのシャツ
関節が固くなり
着せようとすると破れてしまった
もう着られないのに捨てられない
元気だったあなたを知っている
シャツだから

犬の形

中島 瑞穂

いつも腕の中に
犬の形がある
鼻先を肘の辺りに乗せ
手足をお腹の下に折りたたみ
アンモナイトの体裁で
すっぽりはまっている
電車に乗る
買い物する
腕は犬の形になっている
見回せば
鳥の形
猫の形
蛇の形
お互い
目が合うと

そっと頷き合う
食事をする
風呂に入る
甘やかに咆哮し
私を要求する
もはや
私たちに
境目はない
何万年
何十億年
ひとつになって
眠るだけだ
そして
ある日
地層の中から
犬の形を抱えた女が
掘り起こされるだろう

バッタのような人間

中嶋 康雄

バス停の後ろの叢から飛び出した生き物は
バッタのような人間だ
人間ではあるがバッタのように小さい
人間にはバッタの表情は見分けがつかないが
バッタの群れのなかで
そのバッタのような人間の表情だけは
喜怒哀楽の見分けがつく
人間どうしだから慣れると親しみ
目が合うと思わず
笑みを交わすようにもなる
ただそのような存在であるから
バッタの群れの中で生活し
バッタの雌と交わり
草ばかり食べ腸が長い
バッタのような人間はバスの到着を待つ人の
ときにはおっさんの頭の上の天辺の

禿げの部分に飛び乗り
エロエロの脳皮質の中をのぞいては
人間らしい感情を取り戻すことを楽しみとする
妻は怖い怖いし子は金ばかり吸っていく
冬になると
生活を共にするバッタたちは死に絶える
バッタのような人間はひとり
バス停の物陰でふるえながら
生き延びるが
バッタのような人間も人間だから
バスを待つ白い息を吐く人間の
インフルエンザに罹患する
高熱で死にそうになることもある
高熱の最中死んだ母と話していると
春になるとバッタが卵から出てくる
一緒にピョンピョンとんでやると

バッタの赤ちゃんは馬鹿だから
仲間だと思ってくれる
バッタのような人間は
最初はバッタの子をおんぶしてやり
びよんびよん秋に近づくと
雌バッタにおんぶしてもらう
びよんと鼠の死体の上を跳ぶと
巨大なギンバエの腹にぶつかり墜落する
蛆虫と一緒にびちゃびちゃと
腐肉を食べると意外と美味しい
バス停の後ろの叢に雨が降ると
ときどき小さい虹が出る
出たての虹を笠のお蕎麦のように
つるつる吸い込む
青い部分は少しかたいし
赤い部分は少しやわらかすぎる
人間がバッタのような人間を捕まえて
足をもぎ取ろうとするので呪ってやる
するとその人間は阿呆のようになり

小便を我慢できなくなり
バッタのような人間ののこともきれいさっぱり
闇の彼方に忘れてしまい
周りのバッタの動きが鈍くなると
冷たい冷たい風が吹き
雌バッタが卵管を叢の地面に差し込む
バッタのような人間がその
雌バッタのおかしなおかしな形相を
からかいながらお別れの儀式をする
潰れた柿が落ちてくるので
カラスと一緒に食べると
カラスが死にかけたバッタも食べる
びよんびよん踊りをして見送っていると
日が暮れて
疲れた人間がまたバスを降りてくる
バッタのような人間がいつものように呪っている

自分の中の階段を

なす・こういち

自分の中の階段を

いつものように下りていくと
いきなり 老いとぶつかつた
そいつが 取り付いたらしい
体がぐんと重くなった

下りたくもないのに
下りていく 相も変わらず
矛盾が目の前を飛び交っている
一つ消えたかと思うと
また一つ飛び出してくる

暗い階段だが
まわりはよく見える
自分の中は 思ったとおり

いつまでたっても狭いまま
見えなくてもよい夢の正体が
ちらちら見える
それなのに
見たい明かりは見えてこない

いつの間にか
たくさんあつたはずの時間も
少しになってしまっている
過去から来たものなのか
未来から来るものなのか
衰えが体にしみ込んでくる
どこから下り始めたのか
どこまで下りていくのか 不明だが

そのうちに 体の重さは消えるだろう
その時 自分の とどいた深さがわかる
重さを失った とたんに
浮き上がっていくのだ

もはや 上も下もなくなっている
下へ上がっていったり
上へ下りていったり
自分の構造がこわれて
外へ入っていったり
中へ出ていったりするだろう

しかし とにかく 今は
足元を確かめながら
重さに従って下りていく ゆっくりと
初めて見るものだけはしっかりと見て
できるかぎり ゆっくりと
下りていく

尹東柱の母

西海 ゆう子

息子も私も東柱とその母よりはるか年上
それでも私は東柱の母に思いを馳せた

私はあなたを死なせるため日本にやったのではない
できればそばに居て欲しかった

この村を出て京城の学校に入りさらに海を渡って日本へ
そして京都の大学であなたが良き日々を過ごしたことは
最後の写真が伝えてくれる ささやかな慰め

それでも何故監獄で

その短い生を終えなければならなかったか私はただただ悲しい

あなたは罪人として亡くなったが

幼い頃から書くことが好きで心優しく弱い者を見捨てておけなかった
そんなあなたが死に値する罪を犯せたのか

時が人を変えるとしても持って生まれた魂を壊すことはできまい

あなたの眠る丘に立ちあなたを想う

オモニと呼ぶ声が聞こえる

それは懐かしいあなたの声だが
私の心に届かず日々は生きがたい

あなたの生命は時代の嵐に掻き消された

その苦痛ははかり知れず

失ったことを受け入れられないまま

私は涙の井戸に沈んだ

涸れることのない涙であなたを偲んだ

井戸からは月も雲も空も見えなかった

暗闇は深かったが

あなたの遺した朝鮮の言葉が響いてきた

私はあなたが守り抜こうとしたハンゲルの心に貫かれる

あなたは清らかに生きた 恥じ入ることは何もない

あなたの眠る丘に立ちあなたを想う

オモニと呼ぶ声が確かに聞こえる

芝草が一面におおい茂り

あなたが風となって星となって私に降り注ぐ

あなたは私に満ち

そうあなたは私の誇り

一日一枚のはがき

西川 保市

パソコンやスマホのメールに疎い妻は
幼馴染みや知り合いに
一日一枚のはがきを書いている
「返事のお気遣いはいりません」と断って

ところが
書くのが苦手の人たちは
言い合せたように
返事代わりに電話をかけてくるらしい
なかには 次のはがきの催促電話もあると言う
「もう来るころだが来ない どこかわるいのか?」と
はんたいに毎日
はがきをくれるようになった友もある
「書く楽しさに気づかせてくれてありがとう」

あやかって私も
毎晩 寝る前に
一枚のはがきを書く
ひと知れず そつと胸に温めている人や
忘れることのできない彼岸の人にも

明かりを消した天井に
まぼろしのはがきを浮かべ
きょう一日の出来事や感じたこと
はては ふたりの
遠き日のほろ苦い思い出などを
あふれるままに書きつける
(二枚になることもある)

そして
夜ごとぐっすり眠る

世界を分節化する幼児

西村 好子

窓枠に無造作に並んでいた七個の石
地中海から旅してきたのが二個
須磨 舞子 塩屋 垂水 六甲山の石
長男と次男が幼児の時 砂と石に一時凝った
阿蘇山の砂 祐徳稲荷の砂は捨てた
三十年 石は沈黙していた

ある日三歳の男の子が玄関のドアに立った
大人の手の半分程の足で踏ん張って
しばしドアの枠を越えようとしなかった
「何しとっとね、はいらんか」
おばあさんの声にせかされて
やっと上がり框に腰を下ろし小さい靴を脱いだ

三泊四日

布引のハーブ園 王子動物園 アンパンマンランド
ロープウェイでスルスル

象さん大きかった

キラキラした笑いと弾むこころを残して佐賀に帰って行った

静かになった翌朝

ふと窓枠の七個の石に目があった

大きい順に並んでいる

白と黒に分けてある

七個の石に一つの意思がピンと張っている

石同士がなんだかしやべりあっている

三歳の幼児が三十年の沈黙から石を解放した

無秩序の七個の石は秩序ある七個に
柔らかな頭と小さな指によって変容した
訳の分からない世界を幼児は分節する
蚕が桑の葉をかじるように
少しずつ少しずつ世界を分節化する
かじり尽して
時空間に投げ出された時
幼児は少年になる

石段を降りる

にしもと めぐみ

木漏れ日が降り注ぐ
この激しさもまた翳りだすのか
子どもは下らないと言う
生きようとする命が上へ上へと向かわせるのだろうか

降り始めたら
下るばかり……

降りることは意思がないのだろうか

石になってしまった人が
こちらを見ている
私もまた石になる

海が近づいて来た

波たちは無邪気に夏の輝きを無数に照り返している

不在であること

それは 天使たちでした
5人いたでしょうか
走り回ったり
笑ったり
ちいさな笑顔が明るく照らすのでした
あなたはもう動くこともなくなり
静かに横たわっているのです
いいえ もうそこにはいないのかもしれない
もっと 自由で美しいところへと
飛翔して行ったのでしょうか

空は このところあまりに美しく
見上げると
澄んだ青がおおに重なり
天上では

いなくなってしまった人たちが
ひしめきあっているというのに
静かなしずかな空でした
陽は東から神々しく目を覚まして
一日の暮らしを紡ぎます
陽はまた 見届けるように西に沈んでいきます
何回もなんかいい陽を見るでしょう
冥府へ降りていくにも
歌う うたも持たないのでから

あんさん

野口 幸雄

綺麗な着物で初詣ですか。わたしはお参りなんか行かしません。いままで何かいいことおましたか。五円のお賽銭でお願いしたりして厚かましいのと違いまっか

大学受験で合格祈願ですか。お守りも買うて来ましたんか。そんなことせんとちゃんと勉強せなあきませんで。知らん事や分からん事は答案に書けまへんで

社内の研修旅行ですか。新緑の鎌倉散歩よろしいなあ。銭洗弁天さんでお金を洗つてきはったん。お金ふえましたか。それより毎月 定期貯金をした方が確実に金がな

出雲大社で縁結びですか。そんなん今はやりの結婚相談所へいくほうが確率高いのとちがいますか。高学歴、高収入、背の高いイケメン、はよゲットしなはれ

あんさん 運よく結婚したとしても今の世の中 よおー見て 自分の頭でしっかり考えんとせつかく腹をいためて産んだ子を 戦争にとられまっせ

留守

野田 かおり

しろい毛のかたまりが
冬日のなかに落ちている
拾い上げると
栗鼠ほどの大きさの
あたたかそうな帽子
待ちくたびれるまで
この帽子が似合う婦人は
駅を眺めていたのかもしれない
ひっくりかえしてみると
帽子のなかに街がある

どこかしこにも
蒲公英がぼつぼつと明滅して
がらんどうの街は
古めかしく明るい

洋館がならび
その庭に巣箱がひとつ
そばには婦人が立ち
忘れたのではなく捨てていったのです
そう言って微笑んでいる

駅へ向かうそれぞれの
帰る場所は
知らない
落とし物です
と手渡し
硝子の扉をくぐると
てのひらが軽い
帽子のなかに街がある
長い留守のあの館
いつでも誰かが
帰ってゆく

白衣の人

信定 和美

「上を向いてください 下を向いてください 右を見てください 左を見てください」 月曜日の朝 クリーニングしたての白衣の女医は柔らかな物腰と丁寧な言葉遣いながら てきぱきと診察している 地域に他に眼科がないわけではないが患者が押し寄せる

還暦近い彼女が同じ眼科医の夫とニュータウンに開業して 長い年月が経つ 絶大な彼女の人気に比べ夫はさほどの支持を得なかった いつしか彼の酒量が増えていった 医師としての矜持は失わなかったし 仕事のパートナーとしては頼れる存在であった しかし夫婦の暮らしは破綻していった

彼女は修復する努力を怠った 日常に流された 診察を受けるために最低半日待たなければならぬほどの患者数だ 余裕はなかった 毎日をこなすのが精いっぱいだった 今日を終えたら考えよう まず今日を終えて 伶俐な彼女にしては珍しい

彼女は小学校のころから先延ばしすることはなかった 夏休みの宿題も休み前半でやり上げる 後半は小さな図書館で読書に没頭 キュリー夫人やナイチンゲールに憧れた 瀬戸の浜辺でカニを追いシャコ釣りをして楽しんだ 泳ぎも自然に出来るようになった

母としては充分でなかったろう おまけに父親まで不在にして 疲れ果てた夜両腕に彼らを抱え 風呂にも入らないで眠り込んだことを思い出す キャッチボールの相手がいなかった子供たちは野球が得意ではない しかし水泳は上手だ 夏休み穏やかな瀬戸の海が彼らの遊び場だった

看護師や看護助手はピンクの制服で患者に注意深く心をゆきとどかせる 女医にならうことが彼女たちを美しくみせる 雨傘の取り違えにもきちんと対応している 「お顔を載せてください 目をぱちぱちさせてください はいお疲れ様 眼圧も高くなかったですよ 大丈夫です ご安心ください」

朝

橋本 千秋

横断歩道に
出来た水溜り
園児たちが
手を上げて
空を渡っていく

夜のロータリー

やって来た
車のライトに
影が立ち上がり
人が立ち上がる
ドアが開いて
人が乗り込み
影が折れて
乗り込む

癌よ

八田 光代

伯父が
膀胱癌で亡くなったとき
憎しみをこめて
私は

「癌よ」という詩を書いた
宿主を殺してしまったら
元も子もない
お前も死ぬのだ
自滅だ 馬鹿め と。

四十年後
連れ合いが胃癌に
転移性で進行が早いと急かされ
術前検査は
産婦人科と小児科以外

全科回った
揚げ句
ハサミでザクザク
切り開かれた胃
変色した内壁
浸潤は広範囲
しかし
癌は胃に限局
転移なし

癌よ
おまえの命は終ったが
宿主は
生きているよ。

初釜

浜田 多代子

シュツ シュツと衣擦れの音
シュル シュルと畳を滑る足音
シュン シュンと湯のたぎる音
茶室は静寂
ピンとした空気が流れ
お菓子をどうぞ
茶筌の音がシャワ シャワと
茶碗の中に緑のお茶が爽やかに満つ
無の心に出会う瞬間
空気は優しく包み込む
私は今
あなたは今
新しい春に感謝し
きつといい年に出会えるよと

172

骨まで寒くなるころ
いつもの風邪をひき
いつもの肺の痛み
昨年も肺炎で入院をしたんだっただね
三九度の体温計を見て
ほらこの歳で知恵熱だよと笑い
肺炎小僧も逃げ出す
一病息災の私がいる
チンチンと湯のたぎる音は変わり
集う人たちは艶やか
松露のお菓子を口に運び
お先に
隣の人に挨拶し
楽茶碗を手に包み込み
ゆっくりと飲み干す
絹衣のお香のかおりと
陶器のぬくもりと

173

生きるとは

春名 純子

生きるとは
誰かの悲しみの上を
素足で歩くことだった
それは
失うことで見える新たな風景を
辿ることだった

長く生きた私は
マイペースの日々を手に入れて
自分に成った

生きることので得られるものと
生き続けることで失われるものを
天秤にかけてみる

生きるとは
失うことで得るものを辿ること
そして
風にざわめく木立の中を
独り
何処か遠くへ行くことだった

花譜

平岡 けいこ

あなたが旅立ってから
一日も欠かさず生花を捧げています。

あなたのいない世界で
新しい花瓶を買いました
季節ごとに様々な花を生けます
枯れた花を取り除くと
すこし寂しくなるから
代わりの新しい花で
空間を埋めてゆきます
同じくらいの華やかさになるように
主役級の花や脇役の花
大きさ高さ彩りを考えて
花瓶の中の均衡が常に保てるように
絶えず生きた花を足し続けて

美しい世界を作り上げる

世界はそんなふう形成されています
あなたがなくなってもあなたのかたち分
違う人が存在して何事もなかったかのように
一日は終わります

大して華やかでもなんでもない
あなたという朴訥な花が
私の世界を飾っていたことを
ただぼんやり
想い出すために残された日々です

ちいさいおうち

坂東 里美

屋

嵐の夜に揺れている
丘の上のちいさいおうち
戸籍の上の瓦が一枚
遠いところへ飛んでゆき
尸の部首はしかばね
漢和辞典を引きながら
この
ように
うなだれたあなたの手を
握っていた
夏至から冬至まで
ちいさい屋根の下

窓

ベレー帽のマンガ家の
八文字眉が首を出している
ムズムズする空想の種
心音は発芽する
空に向かって
そう

壁

塗り固められた土の上に
描かれた古代人の横顔の
めとはなと口が
クシャミ出そうで
出なさそうで
辛そうな表情をしている
組み合った
二人の男の
どちらに土が付くのか
誰かのうわさに
辟易としている
あなたは
永遠の
耳があるらしい

扉

非常に
悲しみの心を落として
雨戸を閉めて
うずくまっていた ちいさいおうち
柱時計の長針が天井を指すと
唐突にドアが跳ね開き
飛び出す
体を打ち振るわせて
鳴くかっこう
本を開く
木霊する
最初のページ

妖精ナンパ術

福田 知子

逢いたいと思う人にしかみえないソーダ
見つけたいと思う人にしか見つからないラーシ

ルルルあいたいとおもう
さがしにいろいろラララ

もしもあなたが夜更けに遠出をすればラララ 嘆くニレの樹 トトト 怒る
オーク モムン 歩くヤナギに会おうでしょう 病気のビビビ ニレが切ら
れると ララト 隣の樹もいっしょに枯れ レレレ ニレは嘆く 切り倒さ
れ怒るオーク ラクラ クラ その切り株から生えた若木は悪意に満ちてお
り オロロ夜更けて通るのは危険 ヤナギは ヨユヨ夜になると自分で根
っこをグザグザ引き抜き タタタ旅人の後ろを何やらつぶやきながらタタタ
タタタとついてくるのです…

樹の中 森の中 山の頂 緑の草地 洞穴の中 丘の中 地の下 泉や湖の

下 波の下 霧のかなた 海のかなたの薄明り の かなた…

ミルクの流れる、蜜の湧き出る、葡萄酒の流れる川…

妖精たちの好きな大麦、カラス麦、木苺、ラズベリー、キノコ、苔…

赤い実のなるトネリコ、ナナカマド…

生命あふれる赤色エネルギーで悪魔たちを鎮めてくれるでしょう

そうそう妖精のために一杯のミルクを窓辺に出しておくことも忘れずに、ね。

無の始まりから永遠へ

福田 さとる

無から始まった私たちの宇宙は急激に広がって
九十億年過ぎてから太陽が生まれ
地球が生まれた

地球には さらに二十億年が過ぎて
いのちが生まれた
私たちは その末に生まれ
今まさに地球が病的に疲れてきて 熱が出だした
その宇宙の細菌のように 私たちは他の誰にも知られないまま
ひっそり消えていくかもしれない

宇宙から見ればもう消えてしまっているような私たちが
はるかに遠くのこの星で この時間に生まれて
地球のことを思い 宇宙のことを思いながら
地球のすべてのいのちに思いを馳せ

宇宙のすべてのいのちを知りたいと思っている
その思いはここにしっかりと存在している
その感情もこの地とこの時間に刻印されて消えることはない
知っている

私たちは美しい一瞬の旅人であり 永遠の旅人
その一瞬にあなたと出会って
あなたと今 ここで歩いている

今 始まったとしても この一瞬は永遠であって
宇宙が終わる時も消えることはなく
私たちが消えても すべての存在が無に還っても
これだけは生きている永遠のいのち

無の始まりから永遠へ
続くいのち

宙に翔ぶ

福永 祥子

直線に伸びてゆく 孤独の翳り
一人で在ることは 無数の私かもしれない
爪がのびれば 爪を切る
髪が伸びても 不自由はしない
百均で買ったハサミで
バツサリ バツサリ切ってゆく
引き寄せたかった想いなど
今となっては 邪魔なもの
さっぱりと 斬ってしまえ

明日は晴れだと分かっている
雨でも降ればと 願ってしまう

同じようで まるで違ってしまふ
経験はそんな結論へと 結び付く

言葉で互いの存在を認め合う不自由さ

短い年月ともいえる

長い時間 詩のようなものを書いてきたが
未だ「こころざし」の一編も持たず
追い越し 追い抜かれてゆく
後戻りできない時間ばかりが浪費される

何億という細胞の死滅を繰り返し
何万という動植物を食べ尽くし
過ちは明日へ 明日へと

繰り返し 生かされ続け
いつか 私も

この窮屈な肉体を脱ぎ棄て
宙に翔ぶ刻がきたら
それが見えない「いのち」の
誕生かもしれない

蕩児達の時代

藤井 清

半世紀以上昔。
フランス映画「天井桟敷の人々」を観るのに、阪急三宮西口の 阪急文化へ、遊び仲間のKと 二度、三度と通った。
馬車が走っていた時代の巴里が舞台の恋物語。登場する役者は、ジャン・ルイ・バロウ、ピエール・ブラッスール、アル・レットイ、マリアカザレス、ETC。名優達の丁々発止の粋な殺し文句。歌う様なフランス語のイントネーションは甘美で梔子の花の様に官能的であった。

七月十四日。

パリ祭の当日、当時湊川公園にあったタワーの下の小さなバーで、小説家を目指していたNと、アブサンを呷り氣勢を上げていた。
このとき、コキールの味を覚えた。Nの才能にはとても敵わないあとの思いをいつも抱いていたが、Nは永井荷風に弟子入りするのだと上京したまま帰ってこなかった。新聞配達販売店を経営し成功したとの噂を聞いたが、小説の方はどうだったのか。

その頃。

同窓のAと京町筋の喫茶店「ナイル」で月に一度落ち合い、持ち寄った詩の貶し合いに始まり当時の若者の誰もがそうであった様に、実存主義文学を論じ、社会主義の可能性に熱くなっていた。この集まりには、もう一人のAと、Iもいて彼らの鋭い感性に触発され、該博な知識に圧倒されながら刺激的な時間を過ごしていた。

手探りで。

否定と校庭のカードを手に、自作自演の独り芝居の舞台で、トリックスターを気取り水晶玉の幻想に取り憑かれた時代。飢餓に満ちた薔薇の季節が、時間の峡谷の木霊となって今も反響を繰り返している。
Kも、Nも、Aも、もう一人のAも、そしてIも、早世したと知らされてから四半世紀が過ぎてしまった。

キグルミ怪獣の最期

藤本 紘士

投げとばされる寸前に
キグルミ怪獣は棒立ちになる
真っ二つにされる寸前に
キグルミ怪獣は棒立ちになる
首が刎ねられる寸前に
キグルミ怪獣は棒立ちになる
爆破される寸前に
キグルミ怪獣は棒立ちになる
中には
首を落とそうと相手が
身構えた瞬間に
首が、すこんと
みずから落ちてしまったやつも
いたそうだ

おそらく
とどめを刺そうと相手が
身構えた瞬間に
みずから爆発してしまったやつだって
いただろう
棒立ちになったとき
キグルミ怪獣は何を見ていたのだろう
キグルミ怪獣は何を想っていたのだろう
キグルミ怪獣の内に何が去来していただろう
反省、後悔、悲しみ
または呪詛
なおも世界を呪詛するならば
それはなぜなのか

いづれにせよ
キグルミ怪獣の棒立ちは
何も語らない
棒立ちのあとには
何も語れない
棒立ちのかれらの生命が終了したとき
観客である私たちは
キグルミ怪獣が
キグルミであるがゆえに
もはや何も感じない

翼なき天使

法橋 太郎

おれが誕生したのは地下通路ばかりある王国だった。その王は暴君で、妃は嘘でかためたような女だった。貧賤と汚辱。おれはまるで実験用のモルモットのようにして育った。育てたのは魂の種。おれは子供のころから翼を欲していた。

幼少のころから、この生きることの険しさと暗さから飛翔することを願っていた。ある老人が言った。天を否定するものは、天からも否定される。おれはそれを信じた。この世に確かなものは何もない。

おれは太陽への意志を持つようになっていった。たとえ地下通路の国であろうとも、天と地の与えるちからでわれわれが成り立っていることが判ったからだ。決して上へ飛翔するのではないのだ。むしろ底へと飛翔するのだ。人間のとて

も深い底へと。

人間というものの上には卑屈で下には高慢な醜さがおれのちからとなった。翼なき飛翔。おれは地下通路の最下底部まで降りていった。そこでは生きているものに確たる目的がなく、魂は死んだのも同然だった。ここではじめておれが翼なき天使であることがはっきりした。

おれは魂の種を惜しむことなくかれらに植えていった。太陽への意志。かれらは最後のちからで地下通路を駆けのほり、地上へと脱出したのだ。暴君の王も嘘八百の妃もいない地上へと。

太陽の光に灼かれ、盲いた眼をもってかれらは高い崖まで駆けあがった。それから両手を大きくひろげて、かれらは太陽に向かって、つぎからつぎへと幸福に充ち満ちて軽やかに飛翔したのだった。

揚羽蝶

牧田 榮子

開館を待つ駐車場に車がやってくる
にわか雨が上空をとおりすぎる
また とおりすぎ するので
のっぽのケヤキは あたまからぬれていく
枝の先でふるえる新芽がいて
葉脈つたう水をみながら 今をしのいでいる

ひらり さらり
雨宿りの蝶がやってくる
ひらり さらり
けやきの色調をえらんでいる
しがみついた翅の呼吸
ぬれているのか
かわいているのか
それとも
揺られながら眠っているのか
いっしょにいる嬉しさ わずかな辛さ

とおりすぎる雨を じっときいている
車がやってくる
またやってくる

ちいさな水たまりがある
きのうが映っている
ツツジが おひさまをまぶしがり
フラッシュされる 部分もあり
ひらりさらり さらりさらり

おとついてもおっこちている
落ち葉
ちいさな新芽
ひらりさらり さらりさらり

たどっていく空を
ひかりも そんなふうになれた
手つきでケヤキも
きょうを まぜあわせる

朝靄を

増田 まさみ

やまあいの
防空壕に
息を潜め
重なりあい
怯えていた
何の合図か
ふと
絡み合った人塊は
数珠のように
ほどかれ
ばらばらと
朝靄を転げていった
あすは此処に墜ちるぞ

呻くような
低い声が
年端も行かぬ
耳元を掠めた
もう誰もいない
獣道

広島に
ピカドン
ほら、そこだけ
嘘のように
火めく
記憶。

私的風景

松下 玲子

あの日の記憶

一月中旬の石川県能登半島

旅の宿の夕食までの時間 散歩する

日本海は大海原で

ゴオー ゴオー 大荒れの波が

押し寄せ引いては

押し寄せ引いて

白い階段状の模様となって点在している

天空は灰色と暗黒一面の雲

不気味にうごめいていて

割れそうで割れない

果てしなく続く海岸の 傷んだ防風林

防波堤には やっと流れ着いたであろう

漂流物は風化して ゴミの山に

ラベルに対岸からの異国文化感じて

はかなく むなし

何故か いつのまにか

この薄暗い風景の中に 私はひとり居た

何をしていたのか思い出せないが

天空を見上げて ハッ!とする

うごめいていた雲 ゆっくり割れ出して

染み入るような青い色が広がってゆく

太陽が沈む前だったのでしよう

光があらわれ 太い円柱となって

勢い 海に射し込む

しぶく波が 虹色の光の輪となり飛び散って

何と美しき事か

かの聖人が現れたかの如くの衝撃

夕食の時間も近づいていた

ゆっくり散歩する人も見かけたりして

異次元も日常になってゆく

夜毎の散策

丸田 礼子

地に溢れる 嘘
言い訳 詭弁も鎮まって
めがねと染め抜かれた幟を横目に
手を振って歩く
少し傾きながら

細かく
折れたんだ記憶
広げて ほどいて
ひと房の葡萄のざわめき 今も
手のひらに載せて運んでいる

足元から伸びる影の先へ
そこだけがあかるく
金木犀の落花 地表に

湧き出てくる声明を
まっげの先まで聴く

何処へ行くの

澄み渡る月光に刺し抜かれ
待つ 果てのない問いへの
降ってくる応答を

踏みならしてきた日々を
引き寄せて 夜毎の散策
幾つもの風が追い越していく

ポケットの万歩計を取り出し
計りながら 踵を返す
この曲がり角

探す

水こし 町子

雨の日
鍵を開けて家に入る

夕方

鍵が無いことに気づく
家に入ってからの記憶がない
消えるはずがない

探しても見つからない
こうしてある日

何の前ぶれもなく消えていくのか

鍵穴から夜 外を見る

星が見える

南の小さな島の砂浜で

見つけたら 幸せになれると言われ
イガイガの出た砂つぶを探した

夢を見た
伊賀の組み紐のついた鍵で
家の中に入る
なつかしい家の中に
子供の時 飼っていたボスという名前
茶色の犬が尻尾を振る
鍵があつたと目が覚める

次の日

一日中探す

見つからない

テレビでは行方不明者を捜している

雨の日に無くした

雨の降る日まで待とう

幸せの言葉に

小さなガラス瓶に入った星の砂も買った
瓶を振ると カサカサと音がする

ジャコメッティの「歩く男」に遇った

宮浦 久子

嬉しくなって後をつける
帽子の下から白髪まじりがのぞき
着古した黒いTシャツにインディゴ色のジーンズ
茶色の靴の踵が少し
まばらな人通りの中を悠然と歩いている
針金みたいに伸びた体軀は
まさしく「歩く男」

ドラッグストアに入る
さりげなく隣りに立つ
気づかれそうになって急いで離れる
振り返ると もういない
ここはもと海文堂書店
神戸で一番古い本屋さん
閉店のニュースに

いつとき思い出したように人があふれたが
今は明るすぎる店内に雑多な商品が溢れている
昔 ここでジャコメッティの図録を買った
寡黙な顔と無駄なものは一切不要と言わんばかりの肉体
細く長すぎる手と足の「歩く男」に出会い
驚掴みにされて以来

肩をたたく男がいる
大切なものまで削ぎ落としすぎたのか
哀しい目をして立っている
私もぼとぼと落してきた
胸のあたりが奇妙に軽い
同類項の匂いがするらしい
買い物籠にはコーヒートクッキー
一緒にお茶でも飲みたくて
私は黙ってついでに行く

彼女が払うんだらうな

三宅 武

ワンコイン定食
鯖煮込み トン汁 その他
駐車場待ち 十数台

レストラン ランチ二千七百円税込み
広い駐車場 ガラ空き
すでに一時四十分 しゃあないな
案内され 海の見える窓際
離れた席の 男女
青年 ネクタイ 社名入りの作業服
彼に向かって座る 彼女
出始めた白髪 小皺さえ 魅力を添える
貫禄は舞台女優

彼にそそぐ 初恋の視線

デザートが出ているテーブル

オレは勝手に二人をスカウトし
無責任にプロデュース 空想

この若者とは別に
ダンディなおじさま役も 見つければ
平安末期「建礼門院右京大夫」
しかし「後鳥羽上皇」「定家」はともかく
……夜な夜な馴れし枕ばかりは……
目の前の男優に 若武者は 似合わぬ
千年昔の案は ボツにする

十九世紀 二十世紀 外国なら
「カレーニン伯爵夫人アンナ」似合わない

チャラ男「ウロンスキー」役不足
「アクシーンニヤ」農婦役 無理
「グリゴリー・メレホフ」強い意志 不足
かの二人 露西亞・ソ連は舞台にならず

食事が終われば
向こうにいる男女も オレも
現代の一般庶民にもどる
オレはコーヒーを飲み干す

年下男への恋 仏蘭西なら定番
「レナール夫人」+「ジュリアン・ソレル」
「サンセヴェリナ公爵夫人」が
恋した甥「ファブリス・デル・ドンゴ」

彼女は バッグから封筒 キイを出す
受け取る青年
オレと ほぼ同時に立ち上がる二人
彼女が払うんだらうなど
思ったが

貴族社会に無縁の
「ダレル夫人」+「フィレ」
開業医ボヴァリーの妻「エンマ」+「レオン」
名科白「坊や、あたしが好き？」
出征兵士の妻
十九歳の「マルト」+高校生の「ぼく」十六歳

レジに向かう青年 後から歩く彼女
封筒から紙幣を出し
支払う彼
彼女が払ったのだ

宮中 東西の貴族 庶民の恋

海岸から聞こえる鴉の鳴き声
車のキイでドアを開ける彼

森のある村の鬼の太鼓

室井 正彰

大きな森のある村の出口で

悲しげに肩を落としてその婦人は語るのでした
森を通らないと町には出られないのです
戦争に出かけた夫もここでみんなに見送られて

万歳の歓呼の声で日の丸を桜花の風に靡かせて
今は狸や狐も棲む暗い雑木の森になりましたが

わたしが町へ買物に出かけようとすると

ここに棲む鬼が雷のように太鼓を叩くのです
わたしが通り始めるとずっと太鼓を叩くのです
昔から怪しい泥棒や強盗が現れた時などには
鬼が太鼓を打って追っ払ったといわれています

今 この村の森に棲む鬼は老人で

昔 わたしに横恋慕したことがあって

わたしが拒んだので意地悪の太鼓を打つのです

「生意気女」とレットルを叩き付けているのです

ある時 東京から鬼の悪酔い友達が帰って来て
大きな大きな咳払いを鬼の太鼓に重ね合わせ
村中に聞こえるように鬼と呼応しました

司法試験を何度も失敗した敗け癖の小さな男
議員にも自治会長にも成り損ね小鬼になった男
だが 小鬼には美しい娘さんがいて

顔色が少しわるく身体が弱いと思いましたが
愚かな息子の嫁にといわれてもお断りしました

その縁談の仲立ちしたのがなんと意地悪の鬼
この村は太鼓の鬼と咳払いの小鬼の支配する空間
黄昏になると森の蝙蝠や梟になった鬼の子が
その羽音を太鼓に合わせ合奏し始める
はしゃいで馬が嘶くような森の鹿や猪の叫び

その上 後になって耳にしたことですが

村の総報恩講でわたしが席をはずした時のこと

ある女人の大切な数珠が無くなったようでした

「あの女が持つて出るのを見た」と太鼓持ちの鬼
陰口がこそそと村の人たちに広がりまし

大切な数珠は小鬼が自分の懐に入れたのです

「ここでの話はあの女の耳に入れないように
みなは誰もあの女と口をきいてはいけない」と

村の人たちは治安維持法と軍機保護法でわたしの
ストーリーカーに そして鉄のカーテンを敷いたので
す

柿の実一つ落ちて盗んだことにしたのでした
数珠を無くした女人は鬼婆になって

わたしの庭に自転車捨て 盗まれたとふれ回った
わたしは不器用で自転車になど乗れないの

太鼓が聞こえるのは錯覚と笑う人もいますと
婦人は気を取り直し買物に町へ向かいました
泥棒のレットルを剥ぎ落とすように肩を振って
背中が悲しみを乗り越えようとしていました

だが 確かに聞こえてくる鬼の太鼓の響き

口きくなど呼応する小鬼の大きな咳払い

ああ 思えばかれこれ五十年 実に半世紀

一人ぼっちの婦人は鬼の太鼓に耐え続けました

そしてある日 酒飲みの鬼は胃癌で骨になり

小鬼も餅を喉に詰ませ灰になりました

でっぷりと妖艶な鬼婆は黒い額縁の遺影に

神よ 貴方は確かに鬼どもを焼却されました

健気な婦人は米寿を生きてかるい認知症

だれかれなくここにこと幼児のように話しかけ

「鬼や鬼婆のこと忘れたのだらう」と我に返った

村の人たちは彼女をやさしくハングしました

神よ 弱肉強食のこの世界を創造された神よ

七十幾年前 世界は日本列島の灰燼をもくろみ

弱肉の日本は哀れにも戦争に負けたのです

国破れて 日本のある大きな森のある村では

戦で生き残った鬼どもが

戦で亡くなられた兵士の妻 一人の戦争未亡人に

鬼の太鼓を叩き続けたというのです

三国海岸〈遙かな記憶〉

望月 逸子

私たちは 海を目指して歩いてきた
陽の射さない林の道を
夏の樹々の匂いに包まれながら

大阪から帰省した次男と
幼い孫娘らの海水浴のために
祖母は

海苔で包んだ梅干し入りの大きなおにぎりを
持たせてくれた

林道を行く私たちの足元を
突然何かが跳び 私たちの視線を捕まえる
緑地にコバルトブルーや オレンジの紋
鮮やかに光る 見たことのない虫が
規則正しく跳びながら 私たちの先を行く
小さな道案内の姿はたちまち消え
林の向こうに視界が開ける

福井県 三国海岸

目の前に

陽を受け輝く日本海が広がっていた
泳ぎを知らない私は浮輪につかまり
クラゲのように波に浮いて遊んだ

一三〇〇年以上前

白村江の戦いに敗れた百済人が
この海岸に漂着し
絹を織る暮しを始め
進んだ文化をこの地に根づかせた

父や父に繋がる親族の
風貌に深く刻まれた〈痕跡〉の他
何一つ証を持たない私であるが
千年を超える遙かな記憶が
時おり
かに波立つ

暮色の旅へ

森田 美千代

白い壁に
赤い錆貼りついた
目は天空を見据え
生と死のあやうい淵に立ち
黒い感情を潜めている
思いもかけない宣告

薄暗い雑木林の中を心細い小鳥の歩み
ほのかに灯る月見草をたよりに夜明けは
必ずくる 目的地に向かって日に日に重
みを抱えて旅に出る準備をしているのか
窓から見える雲を追う目は澄んでいる
言葉にならない意思で「縮んだ心を詩に
は書かないよ」

あなたもわたしも震災の被災者だった
我が家をそのままに率先して避難所で動
いた 指示は的確だった 職員や被災者
への心遣いは一流で背筋をピンと伸ばす
姿に憧れた 長い季節を闊歩した 記憶
手繰り寄せようとかすれた声で縫い合わ
す 病室の窓下に語りた言葉が静寂に
変えようと

こわくないというのは嘘かもしれない
カーテンの襞からかすかに漏れる
今だから見えてくるの
折り合いのつかない心の洞

地名抄 三篇

安水 稔和

艫作 へなし

海沿いに
土の道を辿る。
色とりどりの花
咲き乱れる丘を越える。

海からの風に吹かれて
夕陽に向かつて歩く。
歩くにつれ近づく
夕陽に染まる椿山が。

草の道に入りこみ
ガレ場を降りて。
ハマハコベ咲く
石の浜に降り立つと。

風のおい
波の音。
夕陽を背に
黒々と椿山。

峯伝い
椿の葉すれかきわけ。
椿の山を登りつめ
頂きの岩場に辿りつくと。

今しも
海に日が沈む。
白い帆下ろして
幻の船が通る。

*椿山 艫作崎突端の小山、日本海側の野生ツバキの
北限。
*帆下ろして 帆札。椿花咲く椿山を見て沖を通る船
は帆を下ろし敬意を表した。

的 神 まとがみ

道の辺の家で櫛そりに腰かけてにこやかに笑う老
人から青い草鞋わらじを求め。この草鞋はなぜ青
いのかと問えばこれは路芝ろしばであんだもので遠
路はきつづけても破れませんと答える。また
もかひたまひねと。おもひつづきたり。

*青い草鞋 稲藁ではなく路芝で編んだもの。路芝は
チカラシバ、ハナビガヤ、カゼクサともいい道ばた
に生える草。

五所川原 ごしよがわら

森田過ぎ
山田過ぎ。
家々倒れ伏し朽ちはて
杭の跡のみ。

木造過ぎて
岩木川。
綱曳つなひきいて渡す渡しを渡り
五所川原に宿取る。

*森田村床前で菅江真澄は二年前（天明三年）のけか
ち（飢渴）の跡を目のあたりにする。「床前といふ
村のこみちわけ来れば、雪のむら消え残りたるやう
に、草むらに人のしら骨あまたみだれちり、あるは
山高くつかねたり。かうべなど、まればたる穴ごと
に、藻、女郎花の生出たるさま、見るこ、ちもなく」
（菅江真澄「楚堵賀浜風」本文）。

わたしのぽけっと

山口 洋子

覚えている

クレパスがほしいです

たどたどしい文字

便箋の真ん中に書いた

昭和二十五年小学三年生になる春休み

あのと

き 叔父さんがなんでも欲しいものを買ってやると言っているから

さあ はよう手紙書き

母が言い

可愛い洋服も新しい運動靴も都会のお菓子も

欲しいものだらけだったけれど

二十四色のクレパスと画板がきた 画板など思ってもいなかったのでびっくりし 赤や緑のほかにいくつも色が並んでいてびっくりし 田舎の小さな学校だから だれもそんなもの

まだ持つてはいない 学校に持つていくのが恥かしくて たぶん長い間持つてはいかなかった 触れるとクレパスはどこかやわらかくて クレヨンとは違うと思った 母はお礼を書くんやで と言う いちばんはじめになにを描いたか忘れた なんでも売っているという元町のヤミイチの話聞いた シルクハットにタキシードの美空ひばりを観た話を聞いた 伯父はこましゃくれた子どもや と言った

ヤミイチがみたい

美空ひばりをみたい

右のポッケにや 夢がある

左のポッケにや チュウインガム

マツヤニくさいガムを噛みながらうたった

こんどはハリスのあまいガムが欲しい

葉ずれとクラッパ

山下 輝代

となりあう色と色
眼のなかで溶けあって
ひとつの色が生まれる
「視覚混合」という名の光学現象

ならば
この音とあの音と
耳のなかで溶けあって
ひとつの音が生まれるのだろうか
いや 耳ではない
きつと それは
こころだ
こころで溶けあって
あらたな音が生まれる

こころに生まれきた
わたしだけの重音
まつさらな血液のように
さらさら さらさら
身の内をながれゆく

南クロアチアの
聖堂前広場で聴いた
無伴奏の男性コーラス
ダルマチアン・クラッパ
あの日から
さらさら さらさら
深くかなしく

初秋の葉ずれと溶けあって
さらさらさわさわ
さわさわさらさら

ポン・ヌフ

山下 晴久

サンジェルマン大通りから
ビュシ通りに沿って歩き
風がドフィーヌを
吹き抜けていけば
そこはセーヌ
ポン・ヌフという名の
橋がかかっているような
五月の空に
白い雲が浮かび
秋には枯れ葉が舞う
街を流れる川の向こう
たとえば雪が降り積もる
曇天の空の下
きみは幾たび橋をわたり

どこに辿り着いたのだろう
打ち寄せる困難を
こともなげに越えて
行きかう人々
詩人はどんな恋をして
画家は何に
嫉妬したのだろう
時は去り
今日も川は流れる
いらっしやいませ
白いアーチと
川面に浮かぶ泡沫うたかたを

見つめている椅子は
あなただけの場所
深いコーヒーの
香りの中で
リセットしますか
あした明日を夢見て
暖かいコーヒー
おかわりいかがですか

五W一H（いつ どこで 誰が 何を なぜ どのように）

山崎 啓治

くたびれた泥まみれのスニーカーが
道端の

霜枯れの叢に投げ出され
身をよこたえて

死んでいる 死んでいる
相棒はなく ひとりぼっち

判明できる五つのW一つのHは
これがすべて

やがて春隣り
下萌えの斎場には
魂魄のぬけがらに
きつと星からは
追悼の黄金の金貨が

舞い落ちることだろう

目を閉じて
欠落の五W一Hに

手を合わせていると
ミニバイクのエンジン音が近づき
手渡された朝刊には

「謎の死、近畿財務局職員」の見出し

ここにも
唯一
生きていた
という
重たい
重たい

事実だけを
残したまま

やわらかい
やけにやわらかすぎる
苛立ちの朝の陽ざしに
抗えきれず
とうとう
へなへなど
地べたに
しゃがみこんでしまった

君に

山中 ゆきよし

夕暮どき
事々しい
妄念は
すべて去れ

愛するもの
かたちを
際立たせよ

時代の思惑や
引摺る因習から
もつとも遠くあれ

自己は脱皮を
求めている

放棄ではなく
推移する

愛するもの
面差しが
そう言っている

季節の裂け目

山本 眞弓

〈入梅〉

木漏れ日を
手の平に残し
逝く五月

舗装路に
じんわりにおう
雨の気配

夜明け前
一声
鴉が鳴いた

ポロン ポロン

心の滴を
つまびく

チュツ チュツ ツイー
スタックカートの
鳥のさえずり

短く
短く切れて
梅雨を誘う

手の平に
じわじわ 染みこむ
雨の音

〈立秋〉

雷雨に洗われ
今朝はアクアマリンの空
宙の奥までズームイン

透明な光のミル・フィュー
冷涼な大気が流れ
遠くでひぐらしの声

あの熱風
ひりひりする酷暑
ぴーと百舌が鳴く

喝采の波が引く
空っぽの球場
見えない星座を探す

季節の裂け目で
脱力した魂

槿の花がポトリと落ちた

風に吹かれてバスを待つ
掴みとれ
おのれの感性

アサギマダラが渡る
蜜を求めて
北から南へ

嘘つき

山本 彰子

痩せ型だが骨太の父。戦地の飢えを生きぬいて、母と出会って私が生まれた。おかつば頭の私は、当時流行りのミルクのみ人形が欲しくてならない。母にねだると、「ほな買うたげる」。いつまでたっても買うてくれない。父に言ったら、父は母をきつく叱った。「嘘ついたらあかん。泥棒の始まりや」。ミルクのみ人形は、口から水を注ぐとお尻からきれいなおしっこが出てき、寝かせると目をつむった。ピンと伸びていた父の背骨は、米寿をすぎた頃から徐々に右に傾きだした。アルツハイマー病になった母が施設に入ると、父の頑固に拍車がかかった。実家の資産は金庫の中。鍵の在処は父の秘密。台所に灯油のプールができたとき、私は嘘をつくことにした。「お父さん、おいしいランチに行きましょ」。父はヒレカツをべろりと平らげ、老人ホームの施設長にするりと言った。「娘は私を厄介ばらしたいんですわ」。私の嘘は軽く見破られていた。父は私に頭を下げず、私は父を引き受けず。意地の張り合いシーソーゲーム。七草の夜はちらし寿司。「ごっつおやなあ」と目を細めたけれど、翌日、父は口開け肩で息する。救急車の中で紫色の足をさすりつづけ、着いたところは河口の傍の救急病院。父は鼻から濃いミルクを入れられ一ヶ月。仰向けになったまま、おしっこは黄色く袋に落ちて

いく。鼻のチューブが苦しく手で抜く。手を縛られ足で抜く。足をしばられ、せん妄が走る。面会に行くとき急いで紐を外し、帰るときには看護師がくくりのくりかえし。「便所にいきたい」。「もうすぐ看護婦さんがくるから」。「このホテルはごはんがでえへんのやで」。「いま特製メニューを考えてくれてはる」。私の嘘は、マシガン。そろそろ如月。医者は言う。「療養型病院へ転院を」。父を紐から解放したい。運よく『ヒレカツ』の老人ホームが一部屋空いていた。入居金は五百万円。「ところでお父さん、金庫の鍵はどこですか」。「二階の本箱の五番目の棚の奥や」。一目散に実家に駆ける。本箱の本をすべて出してみたけれど、「お父さん、どこにもありません」。家中引つかきまわす私はついに頬かむり。父はめでたくホームの人となり、座り、立ち、箸で好物のヒレカツをおかわりするほど元気になって一か月。朝のパンをかじっていたら、しじまを破って電話が鳴った。「お父さんがベッドで泡を吹いています」。残りのパンを胃袋につめこんで、一目散にホームに駆けた。父はミルクのみ人形のように横たわり、目をつむったまま動かない。医者は告げる。「一兩日でしょう」。毛布をめくると白い足。「お父さん、彰子はずくと傍にいるからね」。まぶたがだんだん閉じてくる。「お父さん、ちょっと家に帰ってきます」。

生き仕舞い

由良 佐知子

夜明けが遅い

このところ居間に人の気配で目覚める

きのうは夫の姉たち

相変わらず片付いてないねと

いそいそテーブルを拭いている

戸の隙間から覗いて出ていこうか迷うが

田舎の人は朝が早い

忙しそうなので放っておく

傍らに乳呑み児が眠っている

あれは息子ではないかしら

けさは見知らぬ男

積みあげた本にウイスキーの瓶

落花生の殻が散らばる

太い万年筆で何やら書いている

愉快そうなのでそっとしておく
隅でお手玉をしている女の子
いつかの私に似ているような

生き仕舞い

捨てきれない写真はビスケットの缶に詰め込んだ

夜ごと蓋を押しあげ

見かねて助っ人に来てくれる

入れ替わり立ち替わり

庭に鈴なりのオキナワスズメウリ

やがて真っ赤に色つき

油断しているとすぐ皺皺

自然は進む一方

缶の人は行き来自由で歳とらない

どちらにも甘心する

砂の色

横山 美代子

「お母さん パンケーキ作ってあげる」
言葉の蕾が開く

すべり台のある公園
いつも雨が降ると水溜りが出きる隅っこ
土の上の砂を小さなスコップで掬って丸い器に
手で平らに

「はい どーぞ」

母親は木のベンチに座っている
光が眩しい

次はドーナツ 小石で飾ったショートケーキ

子供の手の中

握られた形を作ったかに見え崩れていく

砂の時が流れる

音を砂粒の間に沁みこませて

「御馳走様 お腹一杯」

母親の聲がまわりの空気を押し広げる

たゆたっている時のまわりに透きとおった数百の色

染まっていく 砂のように落ちていく時間

子供と母親のまわりに漂う色

「お母さん 花の蕾はじめ黄緑だったよね

こんな色になって咲いてるよ」

近くの花壇で子供はしゃがみこんで指さしている

「そうね どれくらいだったかな」

幾重にも花びらが重なった暗赤色のダリア

赤紫のグラジオラス

砂の時は流れていく

色は少しずつずれながら何層にも重なり

誰も見た事もない色を生みだしていく

ときにはかすれ色を失いながらも

未来の果てに向かって

お盆の帰省バス

凜 清太

気が付くと、

私は強い陽射しの下に這い出で、列の中にいた。私の前にも後ろにも、見知らぬ人達がずらっと並んでいた。

一台のバスがやってきて、行き先も確かめずに、押されるままに乗った。

車内は隙間なく埋めつくされたが、意外と息苦しさはなかった。窓外もよく見通せ、長年見慣れた景色が続いた。

揺られながら、どうしてバスに乗ったのか、何処へ行こうとしているのか、考えあぐねていた。

バスは何度も見知らぬ家の前で停まり、そのたび、一人、二人と降りて、その中に吸い込まれるように消えて行った。

やがて、目の前に近しい風景が現れ、私は降りようとしたが、バスは停まらずに行き過ぎた。確かに、建物は見覚えのないものだった。

多分、それからバスは直走り、私は同じ情景を繰返し見続けたのだろうか、バスが発場所に戻った時には、何も覚えていなかった。

私はもうろうとしたまま、車内を見渡したが、まだ多くの人が残っていた。

突然、「今年のお盆はこれで終りです」とアナウンスが流れた。

車内はざわめき、あちこちで落胆の声が起こり、すすり泣く声が聞こえた。それでも、バスを降りていく人達の中には、半ば諦め顔の人もいた。

降りて、二歩三步と歩き出してから、

私がバスに乗った訳、もう何年も続けていること、何故私の停留所がないのかも、うつすらと、思い出せてきたが、

いまは、さほど寂しくも悲しくもなかった。帰る場所がなくなったことを知った日から、「生前の酬い」と自分に言い聞かせてきた。

けれど、

いつかこの住処までもなくなれば、私がこの世に存在した証さえなくなる。

その時、

私はまだここに留まっでいて、

季節が巡れば、すべてを忘れたかのように列をなし、バスに乗り込むのだろうか。

だが、

バスを降りて、往く宛でもなくさ迷う人の姿など、

私はまだ見かけたことがない。

時の花

渡辺 信雄

桜が咲いて 散り
時が すすんでいる
気がつくとも
見知らぬ花が
顔を見せている
眠っていた
何億の花が 手を挙げる
俯いていた 顔を
花に向ける
藤棚の回りは 蜂が 飛んでいて
近づけない
宇宙の 巨大な時計の 振り子が
揺れ
ひとつの花の眼と

私の眼が
出会う 瞬間
触れてはならぬ
と禁じつつ
牡丹の
柔らかな襷の すき間に
入り込む

どこかで
鶯の 鳴く
声

摩耶

背後からなだらかな山が流れて
背丈ほどの草に囲まれた
美しい名前の駅

空色の電車はためらいながら
駅を刹那に過ぎる
誰も乗らず
誰も降りない

遠い日
傾斜の急な坂道を 駆け降りてきた
白いスカートの 君は居ない
「摩耶」の詩人は 何処へ消えたのか
私はそっと改札を抜け

草叢に忍び込み
君を捜すが
風にたなびく草の波

あれから
歳月の電車は
黄昏を走っていて
車窓に白髪の老人を見る

(西日が眩しすぎるじゃないか)

会員の発行物（詩集・詩画集、主宰詩誌）

2017年

- 1月
山崎啓治詩集『もっぺん』粋なべべを ブイッソーリユーシヨン
- 2月
増田まさみ句集『遊絲』霧工房
- 3月
佐藤勝太詩集『生命の絆』文芸社
佐伯圭子詩集『空ものがたり』編集工房ノア
- 4月
安水稔和詩集『甦る』編集工房ノア
植村孝詩集『水の化学者になると』私家版
田中信爾詩画集『Songs』竹林館
- 5月
野口幸雄詩集『妻が出かけた日』濔標
尾崎美紀詩集『出発はいつも』空とぶキリン社
瑞木よう詩集『桜の空』竹林館
今村欣史エッセイ集『……』
- 6月
西村好子詩集『此岸の船』ユニウス
- 7月
水こし町子詩集『いくつもの月』砂子屋書房
寺沢京子エッセイ評論集『平和の橋』竹林館
関はるみエッセイ集『黒き猫』コントラルト文庫
- 8月
長尾佳枝詩集『ばら ササユリ』編集工房ノア

236

玉井洋子詩集『甞る』濔標

- 9月
中堂けいこ詩集『ニューシーズンズ』思潮社
- 10月
あたちかつとし詩集『記憶』私家版
たかとう匡子評論集『私の女性詩人ノートⅡ』思潮社
- 11月
和比古詩集『人間の構図』ユニウス
- 12月
以倉紘平選詩集『駅に着くとサーラの木があった』編集工房ノア
福田知子詩集『あけやらぬ みずのゆめ』港の人
- 3月
山本眞弓詩集『五月の食卓』濔標
- 5月
佐藤勝太詩集『雑草の詩』竹林館
北岡武司詩集『鳩は丸い目で』和光出版
- 6月
香山雅代詩集『雁の使い』砂小屋書房
現代詩文庫『たかとう匡子詩集』思潮社
- 7月
以倉紘平エッセイ集『気まぐれなペン』編集工房ノア
永井ますみ詩集『万葉創詩ーいやけ』竹林館
『永井ますみの万葉かたりー古代プロガー家持の夢』竹林館
月村香詩集『蜜雪』思潮社
- 8月

237

宮浦久子『マスクをすると』 濠標

9月

時里二郎詩集『名井島』 思潮社

10月

以倉紘平詩集『遠い蛍』 編集工房ノア

北岡武司詩集『時のなかに』 春風社

11月

安水稔和詩集『地名抄』 編集工房ノア

会員主宰詩誌

2017年

1月

別嬢102号(高橋夏男)

鳥 71号(足立勝歳)

月刊めらんじゅ119号(大橋愛由等)

2月

おたくさII 24号(鈴木漠)

リフレクション17号(川田あひる)

アリゼ177号(以倉紘平)

河口から特別号(季村敏夫)

月刊めらんじゅ120号(大橋愛由等)

3月

Poetry Edging 36号(寺田操)

現代詩神戸256号(永井ますみ)

Contralt 37号(坂東里美)

ガーネット81号(神尾和寿)

月刊めらんじゅ121号(大橋愛由等)

4月

まほろば41号(たかはらおさむ)

アリゼ178号(以倉紘平)

月刊めらんじゅ122号(大橋愛由等)

5月

別嬢103号(高橋夏男)

多島海31号(江口節)

月刊めらんじゅ123号(大橋愛由等)

Messier 49号(香山雅代)

ア・テンポ51号(玉井洋子)

メランジユ富哲也追悼特別号(大橋愛由等)

6月

おたくさII 25号(鈴木漠)

月刊めらんじゅ124号(大橋愛由等)

アリゼ179号(以倉紘平)

あむの木通信99号 福永祥子

7月

Poetry Edging 37(寺田操)

プラタナス62号(玉川侑香)

ガーネット82号(神尾和寿)

月刊めらんじゅ125号(大橋愛由等)

えくり7月号(高谷和幸)

鳥 72号(足立勝歳)

どうるかまら22号(北岡武司)

8月

鶴鶴8(江口節)

花筏31号(住吉千代美・遠藤昭巳)

まほろば 42号(たかはしおさむ)

アリゼ180号(以倉紘平)

9月

河口からIII(季村敏夫)

唯 第7号(紫野京子)

現代詩神戸 258号(永井ますみ)

おたくさII 26(鈴木漠)

月刊めらんじゅ126号(大橋愛由等)

10月

アリゼ181号(以倉紘平)

時刻表2号(たかとう匡子)
月刊めらんじゅ127号(大橋愛由等)
Contralto 38号(坂東里美)
木想 7号(高橋富美子)

2018年

11月
別嬢 104号(高橋夏男)

播磨灘詩和会30年誌(加古川播磨灘詩和会)
Poetry Eding 38(寺田操)

多島海32号(江口節)

ガーネット83号(神尾和寿)

月刊めらんじゅ128号(大橋愛由等)

ア・テンポ52号(玉井洋子)

1月
鶴鶴9号(江口節)

プラタナス63号(神戸詩人会議 玉川侑香)
どうるかまら23号(北岡武司)

月刊めらんじゅ129号(大橋愛由等)

2月

アリゼ183号(以倉紘平)

月刊めらんじゅ130号(大橋愛由等)

12月

現代詩神戸 259号(永井ますみ)

おたくさII 27 鈴木漠

Messier 50号(香山雅代)

アリゼ182号(以倉紘平)

鳥73号(足立勝歳)

3月

Poetry Eding 39(寺田操)

別嬢 105号(高橋夏男)

ガーネット84号(神尾和寿)

現代詩神戸260号(永井ますみ)

花筏32号(住吉千代美)

足立勝歳個人誌『鳶が城便り』
月刊めらんじゅ131号(大橋愛由等)

アリゼ185号(以倉紘平)
Messier 51号(香山雅代)

月刊めらんじゅ134号(大橋愛由等)

4月

アリゼ184号(以倉紘平)

まほろば44号(たかはらおさむ)

月刊めらんじゅ132号(大橋愛由等)

7月

Poetry Eding 40(寺田操)

どうるかまら24号(北岡武司)

鶴鶴10号(江口節)

ガーネット85号(神尾和寿)

Contralto 39号(坂東里美)

足立勝歳個人誌 鳶が城便り

鳥 74号(足立勝歳)

月刊めらんじゅ135号(大橋愛由等)

5月

時刻表3号(たかとう匡子)

Oct.5号(高谷和幸)

河口からIV(季村敏夫)

風の音16号(風の音社 野口幸雄)

ア・テンポ53号(玉井洋子)

木想8号(高橋富美子)

多島海33号(江口節)

月刊めらんじゅ133号(大橋愛由等)

8月

アリゼ186号(以倉紘平)

別嬢106号(高橋夏男)

6月

現代詩神戸261号(永井ますみ)

10月

現代詩神戸262号(永井ますみ)

アリゼ 187号 (以倉絃平)
月刊めらんじゅ 136号 (大橋愛由等)
エクリ 2号 (高谷和幸)

11月

Poetry Edging 41号 (寺田操)
時刻表 4号 (たかとう匡子)
ガーネット 86 (神尾和寿)
多島海 34号 (江口節)
月刊めらんじゅ 137号 (大橋愛由等)

12月

風の音 17号 (野口幸雄)
月刊めらんじゅ 138号 (大橋愛由等)

編集メモ

今年（2018年）は明治維新からちょうど150年という節目の年です。われわれが住む兵庫県も誕生してから150年を迎えました。

現在の摂津、播磨、丹波、但馬、淡路の旧五カ国をあわせた県域となったのは1876年（明治9）のことです。全国的にみれば二〜三カ国を合わせて新しい県となっている自治体が多い中で、兵庫県は五カ国を糾合するという広い県域です。これは外国に開かれた神戸港の特性が重要視され、「開港場を有する兵庫県が県力の貧弱となるのは好ましくない」※とする薩摩出身で明治新政府の枢要であった大久保利通の意向が反映されたものです。

つまり兵庫県は当時の中央政府の強い意向のもとに誕生した自治体なのです。こうした誕生の経緯はあるものの、県を構成する五つの地域は、現在もそれぞれ異なる特色があり、豊かな表情を見せています。そして文学もこうした地域特性を背景に、魅力あふれる表現活動が育まれています。

われわれ現代詩の担い手は、兵庫県という多様な地域特性のもとで作品を紡いでいくという環境を享受しつつ、新たな詩の世界を創造していくことができたと願っています。

兵庫県現代詩協会は創立して二二周年を迎えました。これからも詩を、言葉を、表現を大切に、たゆみなく詩のあらたな創造世界をつくっていく会員のみなさんとともに歩む団体であることを目指していきます。

本書の制作にあたって、カバーと扉の作品を提供していただいた和比古さんを初めとして、校正作業に協力していただいた多くの会員のみなさんに、この場をかりて厚くお礼申し上げます。

※『兵庫県の100年』から引用

（大橋愛由等）

ひょうご現代詩集 2018（通巻14号）

発行 2019年3月19日
発行人 たかとう 匡子
編集・発行 兵庫県現代詩協会
〒663 - 8006
西宮市段上町 6-14-4
神田さよ（兵庫県現代詩協会事務局）
ホームページ <http://hyogopoetry.sakura.ne.jp/main/>
印刷所 株式会社 濤 漂
〒540-0037 大阪市中央区平野町 2-3-11-202/203
Phone.06-6944-0869 Fax.06-6944-0600
H.P <http://www.miotsukushi.co.jp>